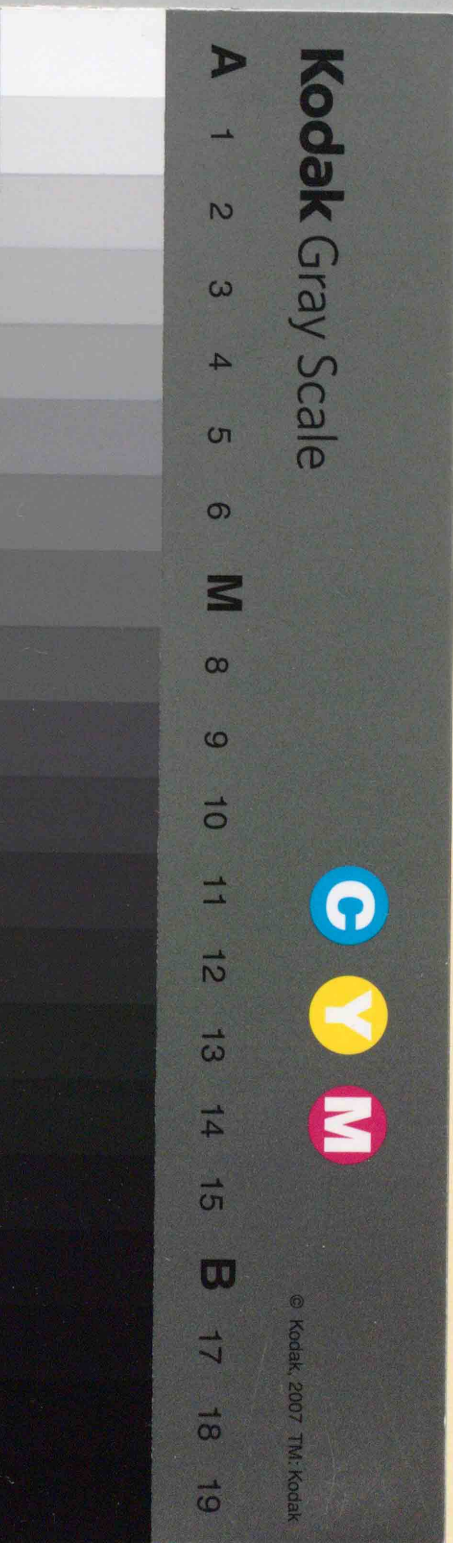
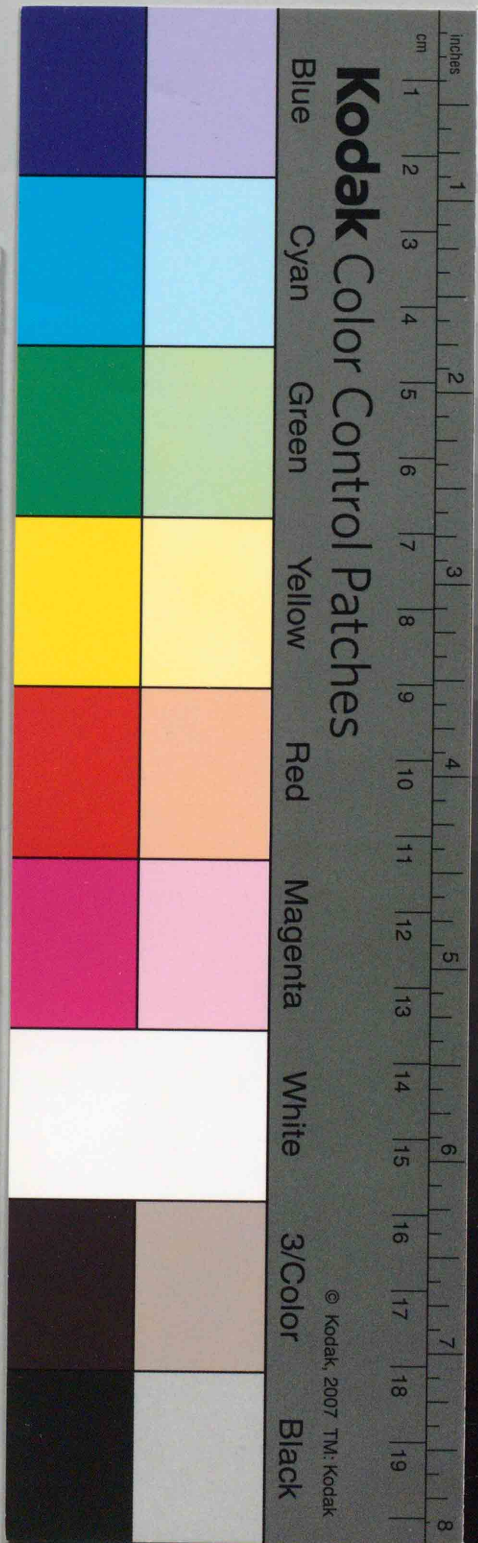


3759
Sa 19
資料室



41527
教科書文庫
4
810
41-1925
200030
1481

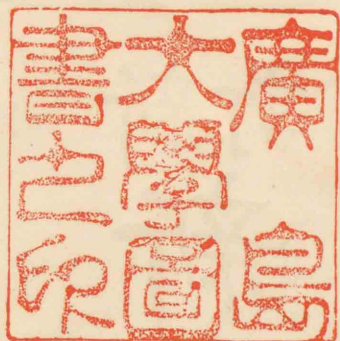
3153
8219

日二十二月一年四十六
濟定檢省部文
用科語國校學中

新新撰國語讀本

文學博士佐政編
大町芳衛
武島又次郎
杉敏介補修

株式會社
明治書院



訂新撰國語讀本卷四目次

一 學問の趣味	澤柳政太郎	一
二 朝の時間(詩)	百田宗治	六
三 朝鮮雜感	谷崎潤一郎	九
四 簡易生活	芳賀矢一	一四
五 俳人一茶	(名人畸人)	二〇
六 晩秋の草と蟲	若山牧水	二六
七 鮎	室生犀星	三〇
八 一萬と箱王	(曾我物語)	三七
九 金米糖の壺	柴田 亨	四〇
一〇 意志の力	(近世立志編)	四八

一 晚 秋…………… 德富蘆花… 五

一、秋 郊…………… 五

二 富士雪を帯ぶ…………… 五

三、寒 月…………… 五七

二 山口峠の危難上…………… (風雲回顧録)… 六

三 山口峠の危難下…………… 六

一四 至 誠…………… 西郷南洲… 六九

一五 乃木將軍(詩)…………… 森 鷗外… 七

一六 アルプ山越上…………… 鹽井雨江… 七

一七 アルプ山越下…………… 八

一八 菜 色…………… 八九

一九 門生に諭す…………… 室 鳩 巢… 九

二〇 玄白の感謝上…………… 菊 池 寛… 一〇三

二一 玄白の感謝下…………… 一〇八

二二 元 日…………… 夏目漱石… 一〇三

二三 海と岩…………… 德富蘆花… 一〇九

二四 詩三篇(詩)…………… 一一三

一、無人島…………… 一一三

二、椰子の實…………… 島崎藤村… 一一三

三、櫟 林…………… 國木田虎雄… 一一五

二五 自然の愛…………… 藤岡東圃… 一二七

二六 無線電信…………… 水上瀧太郎… 一三

二七 十國峠の眺望…………… 高山樗牛… 一六

二八 人買舟上…………… 森 鷗外… 一四

二九 人買舟中 一四
 三〇 人買舟下 一五

新訂新撰國語讀本卷四

一 學問の趣味

藝術を賞翫するのは、固より専門家に限つたことではない。寧ろ其の賞翫は一般素人のことである。深く學問を研究して其の蘊奥を極めるのは、固より學者に屬することであるが、趣味として之を賞翫するは、同じく一般素人のことである。然るに、日本人は概して書畫骨董を愛玩する心はかなり深い。學問に對する趣味は餘りに乏しい。西洋人は固よ



野田朝陽

*Authority.
の義。權威又は大家

り各種の美術を愛玩するが、學問に對しても亦頗る深い興味を持つてゐる。或は實業家にして博物學に興味を有して、立派な著述をする者もあるし、或は外交官にして歴史・地理言語・博物等に興味を有して、其の任地に於ける此等の事項を研究し、本國に歸つては、其等に關する一廉のオーソリテイとなる者も少くはない。之に反して、日本人の間には、専門の學者以外に學術的研究をしてゐる者は殆ど無いと言つてもよい。若し専門の業務以外に多少の趣味ありと言ふならば、それは書畫・骨董・音樂等、藝術上の趣味に限られて居る。専門家にあらずして學問を楽しむといふが如きは、一種の道樂に過ぎないのであるから、此の道樂がないからと言

つても、勿論、咎め立てをすることは出来ない。併しながら、斯かる道樂は誠にあつて欲しいものと思ふし、又この種の道樂がない結果として、日本の學問の進歩を鈍らしめることがないとは言へない。素人に學問を賞翫する風があると、自ら學者の事業を諒解し、之に對する同情が湧出する。大美術家が世に出たり、美術が盛になつたりするのは、之を保護したり賞翫したりする者の多いのに因るので、學問を楽しむ者が世間に多ければ、それだけ學問の進歩を促す事になる。日本に於ける學問の進歩の顯著でないのは、單に學者の努力が足りないのみでなく、素人の間に學問を楽しむ風がないのにも因ると思ふ。近年、我が美術の大いに發達したのは、

相當の保護者が出て來た事に因るのであつて、而も其の保護者は之を美術の賞翫者に見出すのである。學問の賞翫者が多くなつて、之を保護する様になつたならば、其の進歩には著しいものがあるであらう。

學問の進歩は、學科によつては設備器械等に關係あるが爲に、費用を要することが多い。若し篤學の人を保護する者があれば、其の學問の進歩を促すことも隨つて頗る大いなるものである。西洋には美術家を保護する者があると同時に、學者を保護する者も少くない。かくて彼に於ては學問は益進歩する。されば學問を賞翫するといふ道樂は、其の影響する所、頗る大いなるものがあると言へる。

學問を楽しむ風のないのは、單に學問の進歩の爲に遺憾であるのみならず、社會の風尚を高める上にも残念な事である。我が社會に、幾多、道德・風紀上の缺點あるが如きは、茲にも原因が伏在する。又實際家にして著述をなす者のないといふが如きは、實は學問に興味を有せざる所より起る。かかる人は長く實地の業に従事して居つても、只年年歳歳同一の事を繰返して、其の間に知らず識らず熟練を積むと言ふまでであつて、或は自ら考へたり、或は書物に諮つたり、或は人に尋ねたりする事をしない。それ故に學問に興味のない人は、何年同じ事をして居つても、進歩・發達の機會を捉へ得ない。即ち學問賞翫の習慣なきは、實に他人を益せざるのみ

ならず、自身も損する所が少くないと言はねばならぬ。

(澤柳政太郎—隨感隨想)

二 朝の時間

私には朝の時間が一番楽しい
 一杯に日ざしの照りわたつた障子の中で
 しづかに明るい自分の心を見ることは幸福だ
 深い熟睡のあとで爽かな洗面のあとで
 一日の仕事のことを考へるのは楽しい
 その日の仕事にはたとへ破綻や失敗があらうとも
 この明るい希望にみちた心は失はれない

暖かい朗かな朝の日ざしとともに
 私の心は洗はれ浄められて生誕する

私は拂塵をかけるばたばたといふ物音を耳にする
 小犬たちの可憐な鈴の音を聞く
 無邪氣な子供達の足音を聞く
 わいわい騒ぎたてる物音を聞く
 併しどんなに騒しくても私の頭は搔亂されない
 暖かい日ざしの中に
 其等の物音は嬉嬉として喜び勇み
 大空に立昇つて行くのを聞く

萬能の神が彼等を召して行くのを聞く
朝の一絲みだれない諧調音を聞く

朝の日ざしは遅遅として屋根瓦の上を歩む

障子のおもてを歩む

小雀のまへを過ぎる

それは快活で幸福な搖籃のやうにゆれる

寺院の典雅な儀式のやうに進行する

私には朝の時間が楽しい

一杯に日ざしの照渡つた障子の中で

靜に明るい自分の心を視るのは幸福だ (百田宗治—新月)

三 朝鮮雜感

本土を出發する時には、その十日ほど前から、いやに濕つ
ぽい、雨の多い、じめじめした天氣ばかり續いてゐたのだが、
對馬海峽を夜の間を超えて、釜山の港に着いた朝から、空は
拭ふが如くからつと晴渡つて、乾燥した爽かな空氣の肌ざ
はりは何とも言へず愉快であつた。朝鮮に雨の少いといふ
事は以前から聞いてゐたので、恐らく斯うもあらうかと豫
期してはゐたものの、實際想像以上の嚴しい天氣であつた。
港に着いて、町の後に起伏して居る丘の上を、眞白な服を着

(一) Fairyland.

仙郷。

た朝鮮人が、鮮かな秋の朝の日光に、くつきりと照し出されながら、腰を屈めつつ悠悠と歩いて行く姿を見た時には、一晩のうちには自分は幼い子供になつて、一フェアリーランドへ連れて來られたのではないかといふ心持がした。飽く迄も青く澄んで透徹つて居る空を眺めると、何だか頭までがすうつと冴返つて、二晩の間を汽車と汽船とに揺られて來た疲労が名残なく消えて了つた。後で聞いたのであるが、朝鮮の秋は、一年中で一番景色の好い時だといふ事であつた。恐らくそれは事實であらう。年が年中、あんな景色ばかりが續いてゐたら、蓋し朝鮮は世界一の樂土だらう。

釜山から京城までの汽車の沿道が又非常に景色が好い。

緑色の寶石。

(三) Acacia.

(四) Cosmos.

漢江の水は空と同じやうに透徹つて、殆ど翡翠を溶したやうに眞青である。處處の農家の屋根に干してある唐辛が、日光に反射して、珊瑚の如く赤く光つて居る。いや、實際は珊瑚よりももつとずつと赤く、如何にも人工でてかてかと研き立てたやうに輝いて居る。線路の兩側に植わつて居るアカシヤの並樹、コスモスの花、楊柳の枝、百姓家の土塀、それ等の色彩の冴え冴えとした調子は、逆も油繪では寫すことの出來ない、純然たる日本畫の繪の具の色である。

平安朝を主材にした物語なり歴史畫なりを描かうとする小説家や畫家には、参考の爲に繪卷物を見るよりも、寧ろ朝鮮の京城と平壤とを見る事を勧めたい。ゆつたりとした

白い狩衣を着てゐた平安朝の京都の庶民の風俗と、今の京城の市民の服装とは、その感じに於て殆ど何等の差異もな



朝 鮮 風 俗

い其處には、市女笠に似た編笠を被つた男も通る。烏帽子に近い帽子を被つた人人も通る。被衣カキイに似た衣をすつぽりと被つて、衣ずれの音ひそやかに練つてゆく婦人も通る。夕方になると、鵲カササギが五六羽づつ群をなして、町の上を飛廻つたり、羽搏きをしな

から宵闇の往来へ降りて來たりするが、平安朝の京都の町も、大方あんな風に鳥が多かつたであらう。その外、民家の築土の塀なども、平安朝の情景を思ひ出させるのに十分である。

神樂歌に屬す。
曲の名。

京城の朝鮮料理屋の長春館へ行つた時、温突ヌルヒの床の上に敷いた「わらうだ」の如き蓐むしろに、古風な跣坐ハダシをしてゐた人が、睡氣を催すおぼ懶いのろ催馬樂カマクラのやうな歌を唄ひ出した折に、私は殊にその感を深くした。平安朝の公卿たちの催した「うたげ」といふのも、恐らくはこんな風であつたらう。さう考へると、まづくて幼稚な朝鮮料理までが、その頃の日本料理に似通つて居はしまいかといふやうにさへ感ぜられた。

平壤で朝の市場を通つた時に、烏帽子を賣る一人の男が、澤山の烏帽子を高く高く弓なりに反つて居るくらゐ積重ねて、それを片手で肩の上に支へながら、人ごみの中を悠悠と歩いて來るのを見た。これなどは古の繪卷物の中へ寫生して貰ひたいくらゐに思つた。王朝の昔、京都でも、斯ういふ風にして烏帽子を賣歩きはしなかつたであらうか。頭の上へ瓶だの籠だのを載せて歩いてゆく光景も、全く古の販婦ヒナメに髻オシラたるものである。(谷崎潤一郎—自畫像)

四 簡易生活

衣食住に簡易なる事は日本人の美德なり。上代の衣服に

は、曲玉マカヒの如き珠をかけし事も見ゆれど、これとても今日より見れば極めて粗末なる物にして、且つそは高貴なる身分の方にのみ限られたりしが如し。他は概して今日の朝鮮人の如く、無飾の白服にて、特に目を引く裝飾は施さざりしなり。未開の蠻人すら裝飾を好んで、羽毛獸皮又は貝殻などを以て服飾となすに、わが國には絶えて其の風習なし。古來、衣服のみに止まらず、食物住居に於ても亦簡易に甘んじたり。然りと雖も、文明の進むに隨ひて種種の贅澤も進むは自然の勢にして、奈良時代・平安時代と漸次生活程度の高まり來れるは否定すべからず。殊に平安時代に及びて、世は驕奢に流れたりと稱せらる。されど藤原氏など上流社會の者の

奢侈に流れたるは事實なれども、朝廷に於てさへ驕奢を極められて、下民の怨恨を買はれたりといふが如き例は斷じて存在せず。皇室は禮儀道德風雅等の淵源なりしが、モリノハナニシテ儉約の徳も、その範は猶常に朝廷に於て見出されたるなり。

鎌倉時代に入るや、幕府の政は全く勤儉を以て終始一貫せり。事の何たるを問はず、質素簡易を旨とするが幕府施政の方針たりき。されば、鎌倉時代の話として傳はれるものは、儉約に關する事頗る多し。就中、北條時頼の節儉を旨とせしことは、徒然草ツレツレ草に明記せられたり。その母松下禪尼が明障子の切張をなしたること、同書に見ゆ。時頼の用ひたる青砥藤綱の話に至りては、今更言ふまでもなかるべし。此等す

音田翁好の隨筆。

べてその時代の精神を語る。節儉を重んじ、一旦非常時に際會せし時に困窮沮喪せざらんとするものにして、平素は衣鹿食に甘んずるは武家を通じての教訓なり。室町時代に至りても依然として此の精神は失はれざりき。

足利將軍の驕奢と稱せらるるも、さばかりにはあらざりしや、想像するに難からず。金閣銀閣を觀ても、大概は察せらるるなり。總じて世間の富貴驕奢に近づくものは、寧ろ下品なる所行として擯斥する氣風、この時代に横溢せり。即ち、高尚又は風雅は、富貴に遠ざかりて、寧ろ簡易なる生活の中に在りとの思想、流行したるなり。俳人は和歌者流に對して起れる一種の平民的文學者なるが、これも淡泊洒落を以てそ

の道の眞意を得るものとなせり。室町時代の連歌者流にも既にその氣風は認めらるるも、江戸時代に入りて、芭蕉は「俳味は奈良茶にあり」と説けり。奈良茶とは茶粥カユなり。俳人とも總て品性の高潔なるものみにはあらざりしも、少くも芭蕉の風流は、淡泊なる生活を以て風流となしたるなり。

斯くの如くなれば、俳人はその家を飾るに金銀珠玉を以てせず、只閑寂なる趣を楽しみとなす。一椀の抹茶、一幅の軸、一輪の野花の中に無限の趣味を覺ゆ。物多きを望まず、少しきにて足る。富の眼を眩するを望まず、貧しきを以て安んず。かかる淡泊なる氣象なれば、人を羨まず、世を恨まざるなり。禪宗といひ、俳人といひ、いづれも隱遁者、世棄人に似て、實は

世間に立交りて、其の榮華に心を惑はされざる境地に達せんとするものに外ならざるなり。

「佛教は人を厭世的にす」と言ふ。然もわが國に於ては、寧ろその光明的方面の發揮せられたるを見る。その質素なる風、その質素なる風その決斷、諦觀の明、その貧富を超越したる點などは、如何に我等が祖先の精神に甚大なる好影響を與へしぞ。かの元寇の役の一斷の如き、必ずや禪宗に由來すること鮮少ならざりしならん。

我等はこの祖先の遺風をして、永遠に保存、發揮せしめざるべからず。さもあれ、食ふべき物をも食はずして貯ふるが如きは、眞の儉約にはあらず。儉と吝とは似て非なるものな

り。積極的に働くためには、大いに食はざるべからず。ただ、分を守り、心得こそ肝要なれ。木綿着に慣れて、麥飯に甘んずる老農は、絹布を纏うて白米を食ふが如きは、勿體なしといふ。この勿體なしとて、身の程を守る精神は、永久に失ふを許さず。我等は、恭儉己ヲ持シの大御心を體し、努めて贅澤を排する事を期せざるべからず。(芳賀矢一の文に據る)

五 俳人一茶

虱狩を半途で止めた古布子を、ばつばつと二三度振つた儘、直に引懸けて出かけようとする一茶の袖を、名主の嘉右衛門は一寸控へて、「も一つ俺の願ぢやが、何と言つても先は

(二) 信濃柏原の人。通稱は小林彌太郎、俳諧寺と號し、有名なる俳人。文政十年歿す、年六十五。
(三) 田舎の庄屋。今にていへば村長の如きもの。

百萬石の加賀様ぢや、其方も何時もの氣象を止めて、少しは御機嫌取に、體の好いお世辭でも言ふやうにして貰へまいか。「あははつ、これはまた異なお頼みぢやな。併し、外ならぬ名主殿の事ぢや、思ひ切つてやりませうよ。」有り難い、有り難い。いつも其のやうに素直に言つて下さると、其方も好いお人ぢやがな。「はははつ、お前様も亦、いつも其の様に腰が低いと、好い名主殿ぢやがな。」

一茶は皮肉に笑ひながら、敝衣垢面、偃僂て跛の醜い姿を恥づる色もなく、平然として、嘉右衛門と一緒に歩いて本陣へ向つた。

本陣には、梅鉢の紋打つた幕を張渡し、盛砂に打水、高張提

灯、儀容堂堂として百萬石の威を示してゐたが、前田侯は案外に打寛いだ體で一茶を引見した。嘉右衛門は無論御前へは出られなかつた。

「其方が一茶か、よう參つた。豫て風流の名は聞いてゐたが、

蛙たかひ
瘦かへるまける
な一茶是に有
俳諧寺



蹟筆茶一林小

抑、俳味とはどんな事ぢやの。「一茶は畏れる氣色もなく膝を進めて、俳諧の道は孔釋の道と同じでござる。今の俳諧といふものは、ただ題を得て發句を作るだけの事、共に談ずるには足りませぬ。「左様か、して其方の俳諧はどうぢやの。「山水風

月、皆これ俳家生涯の事てござる。心の赴く儘に發するのが、即ち自然の俳諧でござつて、巧まぬものこそ最も俳味は濃かてござらう。尸位素餐の輩に、眞に俳諧が解らう道理はござりませぬ。」と、傍若無人の放言に、席に在るものは色を變へたが、侯は却て莞爾として、「齒に衣着せずよく申した。聞きしに違はぬ其方の器量、予はその意氣が氣に入つたぞ。」あはは、恐れ入りまする。「これ一茶に膳部を取らせよ。」と、やがて搬ばれた膳部に對しても、一茶は何の遠慮もなく、心の儘に酒を飲み、肴を荒した。次いで引出物として、時服二領を下された。一茶は一寸考へてゐたが、にやりと笑つて、有り難く頂戴仕りまする。では、これでお暇を。「左様か、大儀であつたの。」

一茶は御前を下らうとして、ふと何故か躊躇した。どうぞ致したか。「いや、飛んだ事を失念致しました。高貴の御前へ出たら、必ず追従を申すやうにと、折角、名主に頼まれて参つたのに、頓と忘れて居りました。改めてお世辭を申し上げます。」と、一茶は眞面目に、額の汗を拭きながら低頭した。あつはは、面白い事を申す。その罰として一句吟まぬか。と言はれて、

子供迄のんのうと呼ぶ梅の花

一茶としては珍しく、如才のない句であつた。

上首尾で本陣を出た一茶は、拜領の衣服を抱へて、別に嬉しい顔もせず、例の怪しい步調で、飄飄と庵室へ立歸つた。

噂を聞いて庵室に集まつてゐた門人達は、師匠の姿を見

ると飛んで出て迎へた。

「お歸りなされませ。御前の首尾は如何でござりました。」首尾は別に何ともない。「おお、拜領物でござりますか。さ、私がお持ち申しませう。」いやいや、それには及ばぬ。「一茶は何と思つたか、すぐには家に入らず、ぐるりと廻つて背戸へ出ると、抱へてゐた衣服を包の儘、前の田圃へ、惜氣もなく投棄した。

「やれまあ、何をなさるのぢや。」用もない衣服を棄てたまぢや。」でも折角加賀様から下されたものを。「いや、それだから棄てたのぢや。抑、貫つて來るといふことが厭なのぢやが、貴人の前で辭退すると、あれ見よ、一茶は内心では欲しがつてゐる癖に、故と無慾を銜ふのぢや。」と、世上の口が煩いから、暫

く假に受けたまでぢや。かうして丁へば先でも氣が濟む、俺も安心ぢや。さあ、家に這入つて、澁茶でも飲みなされ。」と先に立つて引返しながら、振向いても見なかつた。

庵に入ると、早速、硯を引寄せて墨を磨り、塵紙の皺を伸ばし、秃筆を嚙んで、

何のその百萬石は笹の露

と書いて見せた。門人は顔を見合せた。「名人畸人に據る」

六 晩秋の草と蟲

秋も末、冬の初の日向などに、落葉に莖を埋められて咲いてゐる龍膽は、實に清涼しい。濃紫に幾らか藍の混じたやう

な深い色で、それはどうしても、落葉の早い山國でなくてはよく見られない。

つづらをりはるけき山路のぼるとして路に見てゆく

龍膽の花

同じく秋の終の花に刈萱があり、吾木香がある。寂びたやうで、想の外に艶麗なのは吾木香であらう。刈萱も亦見るにつれて暖かみの感じられる花である。すがれ始めた野邊の日向の花としてふさはしい。

秋の初から終まで、その時その時に見て見飽かぬのは薄である。

わが越ゆる岡の路へのすすきの穂まだわかければ

紅ふふみたり

の頃もよく、十五夜十三夜の月見には、何はなくとも此の花ばかりは供へたく、又秋も何時しか更けて、八千草の枯伏した中に、此の花だけが仄白い日影を宿してそよいでゐるのも、わびしいながらに無くてはならぬ風情である。

野菊、姫紫苑も見落してはならぬものである。

庭園の花にはダリアあり、コスモスあり、黄菊、白菊あり、雞

*Dahlia.

頭がある。ダリアは夜深く机の上に見るがよく、コスモスは小春日和の窓に恰好である。雞頭は素朴な花で、塵寰を避けて栖む庭の隅などに咲くべきであらう。

動かじな動けば心散るものを椅子よダリアよ動か

ずもあれ

くれなるの色ふかみつつ雞頭の花はかすかに實を

もちにけり

薄の花を蟲に譬へるなら、先づ蟋蟀ではあるまいか。さほど際立つたものでなく、さて何時聞いてもしみじみさせられるのは蟋蟀の音である。

わがねむる家のそちこち音に澄みて蟋蟀の鳴く夜

となりけり

松蟲や鈴蟲や轡蟲は、餘りに月並化されて居る。ではどの蟲が最も好きだらうと考へて見るに、私にはまづ馬追蟲である。常に田舎住ひをして居る有り難さに、この蟲が折ふし

蚊帳に飛んで来てとまつて、澄みきつた音で鳴くの聞く。
 やすらかに足うち伸ばしわが聞くや蚊帳に来て鳴く
 馬追蟲を
 家人のねむりは深し蚊帳にゐて鳴く馬追よ聲かぎ
 り鳴け
 (若山牧水の文に據る)

七 鮎

落の葉で桶の上に蓋をしたてないと、若鮎といふ細身の
 ナイフはよく飛出すからである。

予の心は、若鮎を愛するばかりでなく、水の上をさし覗く
 と、その肌の匂がして懐しくなる。まだ初初しくはあるが、そ

* Knife.
 小刀。

の身は大人の人差指くらゐあるだらう。雁行してゐて、人聲
 がすると落花のやうに散つて了ふ。びつくりすること、この
 若鮎より甚しきはなからう。そしてその優しい清らかな顔
 は何時も瘠せて、黒い瞳はぱつちりと伶俐げに瞬いてゐる。
 よく嗅いでみると、若鮎は芽生の匂がする。

予の心は忽ち少年の心となる。三竿の目を浴びて立ちな
 がら、昔のまま綸を垂れてゐるのである。母・兄・姉への取立て
 ての自慢話も手傳つて、數釣れる樂しみにわなないてゐる
 心は、全く善良といふべきであらう。五六十くらゐ釣るのに
 造作はない。毛針には小鳥の毛をあしらつて、一寸見には美
 しい羽蟲かと思はれる。虹のやうな美しい毛針である。その

(一) Canary-bird.

美しさと巧緻な細工とは實際に驚歎に價する。鮎アサギがこれに飛びつくのも無理ではない。曇天の日は紅い毛針、晴れた朝はカナリヤのやうな黄色な針、晝間は大きい毛蟲色。

若鮎はあどけない。水の中の若若しい王様である。水を離れたら、すぐ死ぬ。露の葉で蓋をした桶の中では、一時間とはむづかしからう。水さへ換へれば好いのだ。禦おぼなら一月くらゐ生きてゐる。若鮎は花屑をたべてゐるためか、神経質で、びつくりし易い。そして若鮎は、浅い瀬が好きで、深いところを好まない。鱗のやうな小波が立つて、水の機嫌よく流れる處を泳いでゐる。泳いでゐるといふよりも、遊んでゐると言つた方が相應あつちあつちしからう。

信濃川の上流。

夏晩く、予は犀川の上流の岩壁の上に立つて綸を垂れた事があつた。淵をつくつてゐる故か、水は動いてゐるやうで、又ぢつとしてゐるやうでもある。深く浅黄色の水を湛へて底は見えない。ナイフはここでははずつと大きく、言はば短刀くらゐになつてゐたらうか。をりをり底石に肌をこすつてゐる鮎の姿が、ぎらりぎらりと浅黄色の水の中に閃く。その時、予は一味の清艶を感じた。ぐいと來ると、巴形に水の中をぐるぐる廻るのだ。それを水面から離して釣上げる時は、自分の重さでたらしと垂れ、雫を切り、山澗の緑つぼい空気をよぎつて、これは鮮かな鞘を拂つた刃物の美しい感じてある。瞳は大きくなり、肌艶もなめらかに、觸れる手先に脂はう

つすりと感じられる。と、その心臓までがびくびく掌の中に感じられる。優しい山澗のまはし者、水苔の砥の上でみがいた肌身、夜の水の幽暗をも知らぬげに快活な顔つき。

一體、釣人の心は悠悠たるものであるが、何時も一味の寂寞と隣合せてあるものである。少くとも予が釣する時の心は常にさうであつた。釣れても釣れなくても、予に取つては、綸を垂れて、一日の清閑を塵外に得るだけで事足りたけれども倦けば岩壁の穴に坐つて、以て心を轉じて俗務を考へて見ることもあつた。とにかく釣人といふ者はうら寂しく、ただの人には解らぬ心をもつてゐるものである。若し釣れないと言つて、それきり釣を罵る者がゐたら、それは俗人で

あらう。釣の中にて讀書するのも好いものである。予は只その釣の空氣の中にさへ居ればよいのである。

予は落鮎を見る事は、餘り好まない。加賀の手取川の落鮎は尺を越えるが、併し尾の方から黄味がかつて來るのを見るのは寂しいものであつた。これ以上かれは生きる事が出來ないばかりか、もはや老いぼけて居るからである。宛ら一片の落葉だ。味も盛夏のそれより劣る。眞夏の鮎の香は遠くからも猫が嗅ぎつけて鳴くが、十月のそれには猫さへ餘り寄りつかぬ。

ところが、十月の末頃にもまだ若若しい鮎がゐる。肌は固く緊つて、一寸見には七月の鮎のやうにすらりとしてゐる。

それが十二月頃まで泳いでゐるともすれば冬越をしようと
言はれてゐるが、實際予は鮎の冬越を幼少の折に見たこと
があつた。肌は黒佛になつて、黝ずんで瘡せて、鮎のやうな色
をしてゐた。迅いことは迅いが、どこか肝腎の鮎らしさを失
つてゐたやうである。「こめす」と言ふのはこれだ。

六七月頃に産卵するものらしく、川の上流から一番あと
に落ちて来るものである。決して肥らない。どこか悲しげに
見えた。四山悉く落葉してゐる時に、この若若しい「こめす」を
川の瀬で眺めると、若葉の頃の鮎の姿が偲ばれて懐しい。一
味の哀愁があつて、箸把る前に屈み込んで眺めるのが常で
ある。(室生犀星の文に據る)

八 一萬と箱王

(一) 曾我十郎祐成の
幼名。
(二) 曾我五郎時致の
幼名。
(三) 名は満江、祐泰
の死後、曾我祐
信に再嫁す。

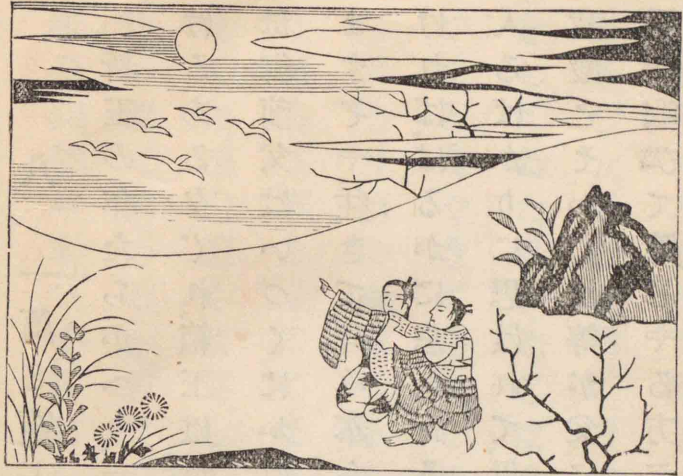
(四) 曾我太郎祐信。

(五) 工藤祐經。

新玉の年たちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりに
ける。ある夕ぐれ、箱王は母の膝のうへに戯れながら、いかに
母御前、父はいづくにおはしますぞや、その佛は何國にまし
ますぞや、往きて拜み奉らばや、母御前いざさせ給へ」と言ひ
ければ、はるかに忘れたる來し方も今更思ひ出されて、消え
入るばかりに思はれて、母泣く泣くのたまひけるは、あの曾
我殿こそおのれ等が父にてあれ」と、心強く語られけれども、
涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しける
は、父御前は、誠やらん、狩場より歸り給ふ路にて、工藤一藤と

源頼朝

相模國足柄上郡
曾我中村



(繪本曾我物語所載)

十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びる

やらん種々の雁に射られ、死に給ひぬ」と、兄御前は語り給ふぞや。當時鎌倉殿種々の雁のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等この里に在りと知らずや過ぐらん。など、おとなしく語りければ、母より始めて女房達まで、皆袖をぞ絞りける。

かくて夏過ぎ、秋も闌け、九月

河津祐泰

たるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ、箱王殿空を飛ぶ翼も皆別の翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物言はぬ鳥類すらかくの如し。我等は人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。われわれより幼き者にて、馬鞍、弓矢をもて物を射ありく事の羨しさよ。此等の事ども思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。とて、

袖に顔をさし入れてさめざめと泣きければ、弟もこざかし
く顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞き
て、あなあさまし、人もこそ聞けいかに和上藤達、夜も更けぬ
るに、などさやうにてはおはするぞ。とくとく入らせ給へ。と
怖しげに言ひければ、二人のものは門外に逃出て、思ふや
うに飽くまで泣きて後に、内に入りけり。

その後は、二人の者どもわが身の程を知りぬれば、世にな
き父を慕ひつつ、語りあはするまではなけれども、ただ目ば
かりを見あはせて、互に袖をぞぬらしける。未だ十歳にも満
たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。

或時、兄弟は、竹の小弓に薄矧うすきりの小矢を取りそへて、遠侍に

出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人立向ひ、あなた
こなたへ射通して、一萬箱王に申しけるは、我等もいつか成
人し、和殿は十三、われは十五にだにもなるならば、如何なら
ん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く刺合ひて射取
りて、とにもかくにもなりなん。和殿も弓をよく射習ひ給へ。
われも射習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。といひ
ければ、弟もうなづきて領掌しけり。年ばへには怖しきこと
かなと、人人思ひけり。

一萬が乳母この由を聞知りて、大きに驚きて、母にかくと
申しければ、母も大きに仰天し、二人の子供を呼寄せて、泣く
泣く語られけるは、實か、おのれ等がさも怖しき謀叛を起さ

伊藤祐親。
祐親の女の生み
し若君。
伊豆國田方郡伊
東に在り。

治承四年八月、
相模國足柄下郡
石橋山の戦。
同郡石橋山の南
にあり。

んと議し合ふなるは、若し人の耳に入りなばよかるべきか。
おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を
松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館に
おいて失はれ給ひぬ。おのれ等かかる謀叛人の孫なれば、敵
左衛門尉上の御敵に申しなして失はるべし。その時、千度百
度悲しむともかなふべきか。そのうへ、汝等が鎌倉殿へ召さ
れし時も、曾我殿歎き申してとどまりたり。その故は、鎌倉殿
石橋山の合戦に打負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひしとき、
梶原景時と曾我殿と二人、心を合せて助け奉りし故に、駿河
國八郡の大名になされし、その御恩を皆返し進らせて二人
の幼き者どもを助けて給はらん」と申されければ、鎌倉殿あ

はれませ給ひて、それ程の志ならば、二人の子ども祐信に預
くるぞ。と仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて、今まで希
有の命を保ちたれ。それにつきても、曾我殿の芳恩をば生生
世世にも報じ盡すべきか。鳥類畜類にても恩を知るところそ
聞け。況や汝等人倫に於てをや。然るを却て曾我殿に歎を與
へん事、返す返すも口惜しかるべし。その恩を報ぜんと思は
ば、速かに謀叛を止むべし。と口説きたてて誠められければ、
二人の子どもも、目と目とを見合せ、顔打赤めて立ちにけり。
それより後は、人の聞かぬ處にては内内談議しけれども、
人目に顯れては語り合ふ事もなし。母も内内怖しき者ども
の心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせんと

ぞ思はれける。(曾我物語)

九 金米糖の壺

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役・家持の人人、一同に座に着きますると、さまざまの馳走がある。時にお年寄は、酒と聞いては笹の露にも酔ふほどの下戸ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうにして居られると、亭主方が氣の毒に思ひ、お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりともお取り下され。と、南京の古染附の壺に大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ持つて出る。座中も、これはよい、お心づき、ひらにお菓子を召しあ

がれ。と勧めると、年寄もわるうはなし、然らば頂戴を致しませう。と、壺を引きあげ、手首を突つこみしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて抜けませぬ。どうぞして抜けるかと、色色にこじまはして見ても、引つばつて見ても抜けず。まごまごして居られると、側から見つけて、どうなされましたぞ。いや、手が少しつまりました、思ふやうに抜けませぬ。と、眞顔になつて言はれる。それはお氣の毒、私が壺を持つて居りませう。無理無態に手をお引きなされ。と、一人が向うへ廻つて、壺をつかまへ、後へ引くと、年寄は手を前へ引く。互に「えいや」と引きあふ有様、景清と美保谷が鑊曳をするやうなと、座中が一同に

悪七兵衛景清
美保谷十郎

どつと笑へど、年寄はなかなか笑はず、泣顔になつて、「どうも痛んで抜けませぬ」といふ。さあ、これから大騒になり、「醫者どのを呼んで來い。骨接てはゆくまいか」と、酒宴の興も醒めはてました。

時に、五人組が一人進み出て、「いづれもお騒ぎなさるな。われら承つたことがある。昔、司馬溫公と云ふ人、幼きとき、大勢の子供と共に、大いなる壺のほとりに遊びましたが、一人の子供、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供は之を見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つて、かの壺へ投げつけましたれば、壺は割れて、はまつた子供は不思議に命を助かりました」と、或人の話ぢや。今お

名は光、字は君實。溫公は諡。宋の名相。

年寄の御難澁は此の話に能う似てある。いざや、われらが司馬溫公となつて、たとへば、その古染附の壺が失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ」としかつべらしく煙管をひつさげ、向うへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手をつき出すと、ただ一打に打碎いた。何がさて、座中は金米糖がちらかつて、雪を降らしたやうになると、「やれ、お年寄お助かりなされたか」と、その手を見れば、抜けぬこそ道理、金米糖を一杯攫んで居られたと申すことぢや。なんと可笑しい話ではござりませぬか。

攫んだ物を放しさへすれば、自由自在に手は抜けたものを、一度攫んだら、首がちぎれても放すまいと、片意地な生れ

つき、それで、自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申せば
錢金の事のやうなれど、攫むものはこればかりではない。器
量のよいのを攫み、賢いを攫み、負けをしみを攫み、家柄を攫
み、身代のよいのを攫んで、放すまいとかづき歩くによつて、
教を聞くこともならず、樂をすることもならず、慎も出来ず、
せん方なさに、癩氣抑へたり、顔しかめたり、酒飲んで紛らし
たり、さりとは氣の毒なものでござります。壺割つてしま
うてからは、何と言つても詮ないことぢや。身代の壺を割ら
ぬさき、御用心が第一でござります。(柴田亨—鳩翁道話)

一〇 意志の力

「意志の剛強なる人と急流とは、自ら其の道を開く。とは西
洋の諺である。意志ある處、そこに光明がある、活力がある。男
子一たび志を立てた以上、その成就を見るまでは、如何なる
艱難が襲ひ來るとも、牢乎として揺がぬ磐石の如く、如何な
る苦痛が迫るとも、卓然と聳ゆる大木のやうな堅忍不拔の
心がなくてはならぬ。之が意志の力である。由來人生の行路
には様様の誘惑がある、幾多の障礙がある。その誘惑に打克
つ克己心、その障礙を打破つて進む勇猛心、皆これ意志の力
である。世に成功者と稱せられ、或は偉人と稱せられる人達
が、世路の難嶮を突破し來つた跡をうかがへば、總て彼等の
意志の力の如何に強きかを示さぬものはない。

* Cecil Rhodes.
(1853—1902)

人は五十年の壽命を以て千年の計を憂ふるものである。その五十年の壽命をも完うし、事業を成就せんには、健康が第一の要素である事は言ふまでもないが、その健康すらも、大部分、意志の力で左右せられるものであるといふ事を忘れてはならぬ。

今から二十餘年以前に死んだ英國南阿の首相セシル・ロイツ氏は、十八歳の時、大學在學中に肺病に罹つた。醫師は不治の難症だと宣告し、彼自身も一時は殆ど人生に絶望したが、強い強い彼の意志は、この間にも無限の活力を湧起せしめた。彼は學校を退き、奮然起つて南阿弗利加の蕃地に赴き、其處に病を養ひながら、吾が生命を託すべき何等かの事業

を發見せんとしたのである。



セシル・ロイツ

窮屈な學窓から脱けいでて、廣漠たる南阿の天地に身を投出したる彼は、まるで生れ更つた心持になつた。彼は放たれたる鳥の如く、荒野の大氣を呼吸し、椰子の葉蔭に身を包まれて、清新快活なる大宇宙の子となつた。友とするものは一卷の聖書のみ、しかもそれに依つて天涯孤客の慰安を得るには十分であつた。境遇が變り、見るもの、聞くもの、悉く新になれば、人の身は自ら生れ更つたやうにならざるを得ない。かくて病は數年ならずして癒え、體質は一變して、土人に

(一) Kimberley.

も劣らぬ頑健なものとなつたのである。

その間に、彼は一大事業を發見した。それはキムバレーといふ不毛の地に、千古空しく鎖されてゐた無限の寶庫なる金剛石坑の開掘である。彼は萬難を排して此の事業に従ひ、忽にして一大成功を贏ち得て、巨萬の富を積み、偉大なる名聲を得た。かくて三十三歳にしてケープ殖民地の議員に選ばれ、一躍して首相となり、遂に南阿戰爭を起して、南阿弗利加をして英國の範圍たらしめた。

(三) Philip Jordan.

(二) Cape Colony.

彼は一千九百二年、五十歳で世を去つたが、其の半生が頗る強健で、精力絶倫であつた事は、その爲しとげた事業を見ても知られる。永らく彼の秘書役を勤めてゐたフィリップ、

(四) Matabeleland.

ジョルダン氏は、彼の私生涯を記して、ローツ氏は異常な事業的才能を有し、一度重要な事件に對すれば、不眠不休、良成績を擧げる迄は已まなかつた。氏は他の優れたる人人が五人で完成する事業を、一人で爲し得る非凡の頭腦を有してゐた。と記してゐる。且つ南阿戰爭の際の如きは、熱沙の曠原に野營して、數日間、マタベル蕃族と對陣し得たのである。

氏は實に南阿大英會社南阿合同大金鑛會社等の専務理事であると共に、南阿大陸電信建設中の難問題を解決し、兼ねて巨大なる農園果樹園を經營し、他面には、政事家として千八百九十年より七年間、ケープ殖民地の首相となり、首相辭職後は、進歩黨の首領として該黨を總理した。斯く許多の

大事業の爲に、毎日平均五十通からの手紙に接したが、大抵は自ら披見した。然も英雄の胸中自ら閑日月がある。彼は埃及土耳其伊太利の各地に遊び、又日本の風光にも憧れてゐたといふ事である。

彼の遺した巨萬の財産は、その遺言に依り、セシル・ローツ獎學資金となつて、彼の生命を傳へ、彼の經營した南阿の一角は、大英帝國無上の寶庫として、英國今日の富を供給する一大要素となつて居る。

セシル・ローツの半生の如きは、意志の力がよく健康を左右し得べく、且つ人間の活力の殆ど無限であることを示してゐるではないか。(近世立志編に據る)

一一 晩秋

一、秋 郊

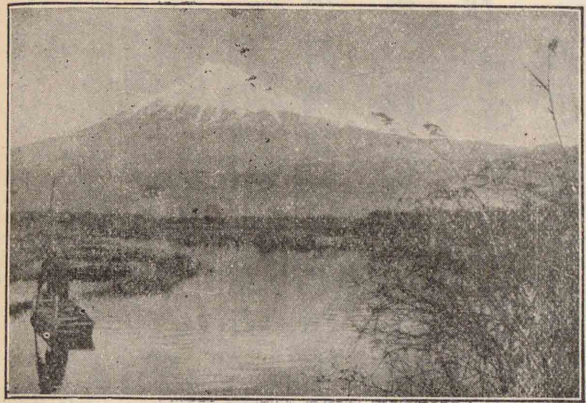
柿の落葉を踏みて後山に登る。黄茅蕭蕭として亂れ、龍膽の碧、棗實の紅と徑を綴る。山上より見れば、田は盡く刈られ、麥の緑なほほのかにして、村も瘠せたり。晩秋の野いたく寂びぬ。

鳥五六羽あり、山上の樹より立ち、鳴きつれて彼方の村に向ふ。啞啞の聲、滿山に響く。

二、富士雪を帶ぶ

富士雪を帶ぶ、さやかに雪を帶ぶ、秋空何ぞ高き。風威を帶

ふ。相模灘の怒號何ぞ壯なる。この空とこの海との間に、玲瓏として立つ富士の秀色を見ずや。絶頂より五合目のあたりまで、銀よりも白き雪は桔梗色の山層を被ひて、上は隈なく、



下はさながら笹縁とれる様に山を包む。雪色浄うして點塵なく、日光に輝きて水よりも澄める。晩秋の空に襯し、豆相の連山を踏み、萬波雪の如く立騒ぐ相模灘を俯瞰して、秀麗皎潔、神威十倍するを覺ゆ。

嶽頂の雪、實に富士の秀色、神采を十倍せしむるのみならず、更に裾野

の大景に眼睛を點ず。東海の景は富士によりて生き、富士は雪によりて生く。

三、寒月

戸を開けば寒月晝の如し。風は葉もなき萬樹をふるひて、飄飄颯颯、霜を含める空明に搖動し、地上の影、木とともに婆娑たり。其處此處に落散る木の葉、月光に閃いて、さく、さく、さく、玉屑を踏む思あり。

仰ぎ見れば、高空雲なく、寒光千萬里。天風吹いて、海鳴り、山騒ぎ、乾坤すべて悲壯の鳴をなす。耳を敬つれば、寒蛩籬下に鳴きて、聲絶えんとす。風に向ひて、月色霜の如き往還を行く人の履齒、戛然として金石の響をなすを聞かずや。月下に狂

ふ湘海シヤウカイの彼方に、夜目にも富士の白くさやかに立てるを見ずや。

月は照りに照り、風は彌吹イタタキきに吹く。大地吼え、大海哮り、浩浩ハハハ又浩浩たり。

大なるかな自然の節奏ソウソク。この月とこの風と、殆ど予をして眠る能はざらしむ。徳富蘆花―自然と人生

一一二 山口峠の危難上

奈何なる早急ソウキウな場合に際しても、常に用心は周到シュウタイでなければならぬ。油斷大敵ユダンダイテキといふ俚諺レキの通りで、その油斷から、俺は危く兇漢キョウカンの刃の下に一命を奪はれようとした事がある。

(一) 鳥尾小彌太。維新の際、勤王の大義を唱へて東西に奔走したる人。明治三十八年歿。

(二) 東區、天神橋の南詰。
(三) 旅館の名。

これは俺が大阪に居つた時の話で、佐賀の亂へ遣るべき兵が不足した時、俺が鳥尾(一)の命を受けて、和歌山へ舊兵隊を連れに出かけた時の出来事である。大阪鎮臺から金銀貨を取混ぜて五百圓だけ受取り、不足な分は出先へ送つて貰ふ事にして、其の五百圓を無造作にハンケチに包み、洋服の下つ腹へ押込んで、八軒屋(二)の播權樓へ戻つて來たが、店先で俵を降りる途端に、かのハンケチ包を取落したので、金貨・銀貨が土間一面に散らばつた。出迎へた番頭や女中が拾ひ集めてくれたのを、其のまま包んで懷へねぢ込み、俺は鞆一つに短銃一挺を携へたのみで、早速旅装を整へて、三人曳の俵を命じた。

春とは云へど、日影は未だ軒に寒い。勢よく俵を飛ばせて、大阪の街を出離れたのは午後四時頃であつた。往く程に、堺・四池を後に、郊外を縫うて、凸凹道を俵に揺られながら、信達しんたの手前へ差蒐つた頃には日も暮れて、静な春の夜の人家は寂寥として、前にも後にも淋しく車輪の響を聞くばかりであつた。

これから山口峠を越さねばならぬ。この峠は和泉と紀伊との國境にあるので、俵は役に立たぬから、俺は先曳の車夫に「貴様は一足先へ行つて、四人昇の駕籠の用意をしろ。」と言ふと、はい、承知しました。」と肩綱を外すや、一目散に駆けて行つた。程なく信達の驛へ着くと、既に駕籠の準備が出来てゐ

て、四人の駕籠昇が支度をして待受けて居た。

其處で俵を乗捨てて、春の夜寒を防ぐために、軍服を脱いで鞆に入れ、襦袢じゆばんと着かへ、防寒具に襟を埋め、軍刀は何の氣もつかず駕籠の竹柱へ縛りつけて、打寛いで出立した。一步と爪先登りに登り、幾度か暗い樹立を潜り抜けると、駕籠は何時か山路にかかつて居る。ぎしぎしと息杖のきしむ音、さらさらと梢を掠める春の夜風。

ああ月が出るなと思ひながら、粗末な駕籠に背を凭せてゐる中に、ついうとうとと睡氣がさして來た。何しろ大阪での連日連夜の談議で酷く疲れて居たので、知らず識らず臉が重くなつて來る。すると、先刻から大聲で話し合つて居た

駕籠昇仲間が、急に小聲で何やら怪しげな符牒フダで話し合つて居るのに気がついた。はつと思ふと、彼等の「大丈夫だ、あれを持つて来たから」といふ二言三言が小耳を掠めて聞えた。「さては近頃四池邊へ出て殺人強盗をやる奴等の仲間だな」と感づくると、睡氣も俄に覺めはてて、俺は焦眉ヨネアイカシの急に處すべき手段を講じねばならなかつた。

憎むべき駕籠昇どもは、途途も俺が全然寢込んで居るものと安心して、尙小聲で話しながら、山路をとつとつと登つて行く。どうしたものかと思ひながら、そつと薄目を開いて左右を見遣ると、左手は切つそいだやうな山腹、右手は物凄い谷間の底にわびしい瀬音が聞えて居るではないか。此處

てうつかり手出しをして、若し駕籠のまま谷底へはふり込まれたら骨灰微塵フチコ、それこそ百年目だ。よしつ、峠まで我慢しると觀念して、舊の儘に駕籠の中で狸寢入ヌイネをして居たが、斯かる破目に陥つたのも、全く俺の不用心から起つた事で、仕方がない。鎮臺で受取つた金包の取扱を粗末にして、播權樓ハクワンロウで落したのを悪車夫が見て居つたので、一味悪黨の駕籠昇奴等に耳打ちして、この峠で俺を殺さうと企てたのである。何しろ敵は四人、身方は一人、假令遣付けるにしても、手創位は負ふ覺悟でなければならぬ。

更に一層の不覺と言はねばならぬのは、苟も陸軍武官の職にありながら、軍服を脱ぎ、軍刀を駕籠の柱に縛りつけて

*
前漢の智謀家

了つた事で、今急にその武器を取外す事が出来ない。昔漢の陳平が船中で賊に襲はれた時、身ぐるみ脱いて飛出したといふ話がある。この駕籠舁共も金が欲しさに俺を殺すのだ。金さへ出せばそれでよいのだから、一層懐中から五百圓をはふり出して遣らうかとも思つたが、併し兇漢が果してそれ承知するかどうか、毛を吹いて疵を求めるのは馬鹿馬鹿しいし、第一武官の職に對しても相濟まんと、暫く俺は最初の不用心を後悔してゐた。

併し何時までも斯うしては居られない。袋の鼠と思つて居る彼等の手中に、貴重な一命をくれてやる譯には往かぬ。何とか處置を採らなければならぬ。この時、俺は、不圖、その

昔鎌倉の尼の詠んだといふ歌を思ひ出した。

千代のをがいたたく桶の底抜けて水たまらねば月も宿らず

この歌の心に思ひ及ぶと、俺は心機一轉した。よしつ、遣付けろ。と決心して、襦袢の内懐を探つて、泰然として彼等が急ぐに任せて居た。

一三 山口峠の危難 下

夜は靜に更けて、峠の空に春の月が浮んだ。樹立の茂みて懸崖の肌は黒く、うつすりと照る月の光も其の夜は趣ありとは思はれなかつた。先刻の「あれを持つて來た」といふ言葉

の意味は、峠の上で俺を殺す兇器を持つて来たとの事に相違ない。併し俺はこの通り體も巨きいし、武人であるので、彼等にも油斷はない。十分首尾よく遣る積りて、腕節の強い兇漢が揃つて遣つて来たらしい。汝奴、今に見ると寝て居る筈の俺は、拳銃をしつかり握つたまま、態と臉を閉ぢて居た。

愈坂路を登り詰めて、山口峠の絶頂へ来た。斜に伸びた山路の傍、僅の平地に一軒の茶店があつた。茶を汲む人は麓へ降りて、破れた簀の子を掠めて淋しく風が吹く。彼等が一方の崖際に靜に駕籠を昇きすゑた瞬間、こらつと怒聲一番、横飛びに駕籠の中から躍り出した間一髪、駕籠昇は拔身を逆手にぐさと駕籠の上から突込んだ。一人の奴は狼狽てて、駕籠の柱へ斬付けた。

この時迅く、俺は仁王立ちに突立つて、一發どんと撃放した。兇漢どもがたじろぐ暇に、俺は後の高地へ駈上りざま拳銃を差向けて、「さあ来い、幾人でも遣つて来い。不埒な奴だ。」と怒鳴りつけた。實際その頃は血氣盛り、拳銃は撃馴れてゐるから、三人や五人を向うへ廻しても遣付ける積りであつた。併し唐突に拳銃を向けられて酷く面食つたものか、四人の奴等は二人づつ右と左へ飛ぶが如くに麓を指して逃失せし。拔刀を提げて居たのは確に二人であつた。兇漢どもの毘は斯うして免れたが、あの時若し今少し寝込んで居たなら、あの峠の頂で串刺に遣られたに相違ない。

それは好いが、困つた事には駕籠昇を追ひちらしたので、寂しい峠には、空駕籠と俺一人が取残されて了つた山口驛まで降るには、彼等の逃げて行つた山腹の峻路を辿らねばならぬ。若し途中で彼等から悪戯されては困ると思つたが、何時までもぐづぐづ斯うして居る譯には行かぬから、襤褸の上に、軍刀や鞆を十文字に紐をかけて背負ひ、頭から毛布を冠り、右手に拳銃を握つて、辨慶が七つ道具を背負つたやうな妙な態で、のこのこと山路を降りはじめた。

麓近く來かかつて漸く安心したが、その時如何に危急な場合にも、決して狼狽せず、最善の策を講じて、油斷さへなければ、危難を免れる事は出来るものだと、つくづく感じた。

それから夜の白白明けに山口驛に着いて、和歌山へ急ぎ、豫定の任務を遂行したのであつた。(「風雲回顧録」に據る)

一四 至 誠

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一時の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて、一旦その差支を通せば、後は事宜次第、工夫の出来る様に思へども、策略の煩ひ屹度生じ、事必ず敗るるものぞ。正道を以てこれを行へば、目前には迂遠なるやうなれども、さきに行けば成功は早きものなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡

し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねべし。己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐りて驕慢の生ずるも、皆自ら愛するが爲なれば、決して己を愛すまじきものなり。過を改むるに、自ら過てりと思ひつかば、それにてよし。その事をば棄てて顧みず、直に一步踏みだすべし。過をくやしく思ひ、取繕はんとて心配するは、茶碗を割りし時、その缺を集めて合せ見ると同じことにて、詮なき事なり。

命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならては、艱難を共にして國家の大業を成し遂ぐる事は望み得ざるなり。

*曾我十郎祐成と五郎時致、父の仇工藤祐経を富士の裾野に討つ。時に建久四年（八三三）なり。

道を行ふ者は、天下舉つて毀るも足らずとせず、天下舉つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずるの篤きが故なり。

天下後世迄も信仰・悦服せらるるものは、只これ一個の誠なり。古より父の仇を討ちし人、その數擧げて數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至るまで兒童・婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらる

西 郷 南 洲 筆 蹟

道を行ふ者は、天下舉つて毀るも足らずとせず、天下舉つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずるの篤きが故なり。

天下後世迄も信仰・悦服せらるるものは、只これ一個の誠なり。古より父の仇を討ちし人、その數擧げて數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至るまで兒童・婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらる

明治丙子五月日

るは僥倖の譽なり。誠篤ければ、假令當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。(西郷南洲)

一五 乃木將軍

つはものの武勇なきにはあらねども
眞鐵なすベトンに投ぐる人の肉
往く者は生きて還らぬ強襲の
鋒先をしばし轉じて右手のかた
圖上なる標の高さ二零三
巔の二つ聳ゆる石山に
たえだえの望の絲を懸けてこそ

* Beton.

きのふけふ軍の主力を向けてしか

霜月の三十日の夕まぐれ

將軍は高崎山の師團より

ただ一騎柳樹房なる本營に

歸らんと曲家屯をぞ過ぎ給ふ

ほの暗き道のほとりに見給へば

身中みな血に塗れたる卒ありて

そびらには早こときれし將校の

亡骸を搔きのせてこそ立てりけれ

「汝は誰そそを何處にか負ひてゆく」

「聞召せ背負ひまつるは奴わが」

主と頼む乃木將軍の愛兒なり
 年老いし將軍の家の二人子
 そのひとり勝典ぬしはいちはやく
 南山にうたれ給ひて残れるは
 弟の保典のぬし一人のみ
 背負へるはその一人子の亡骸ぞ
 父君は心雄雄しく我が主をも
 隊附のままにあらせて討死の
 身の果は己と三たり葬をば
 ひと時に營めと宣り給ひしを
 人人の強ひて計らひつるにより

さいつころ友安旅團の副官に
 職かはり未だ程經ぬにこの朝開
 あへなくも空しき骸となりましぬ
 果てましし處は高地二零三
 眼鏡もて敵の備を望みます
 うら若き額の只中打ちぬかれ
 ひと言をのたまはんひまもなく
 持口の南の峯に失せたまふ
 その骸を奴背負ひて此の村に
 ありと聞く野戰病院たづぬれど
 くるほしき心からにや尋ね得ず

かくいふを駒をとどめて聞きましし

將軍は病院の旗ある方を

鞭あげて彼方にこそとさし給ふ

面ざしはたそがれ時に見えねども

目ざとくも雲の絶間ゆ覗ひし

寒空にまだ輝かぬ冬の星

更闌けて友なる星に將軍の

睫毛だに動かざりきと語りけり(森鷗外「うた日記」)

一六 アルプ山越 上

お別れ申したるは、故山の百花はなやかに我が戎衣

西紀前二二

(三)Alps.

468

の袖に薰り、春風軽く征旗を吹送る頃に候ひしを、いつしか花去り、青葉も過ぎ、秋月また更けて、アルプ山麓に到り着きたるは、はや満目の霜露、鐵衣にしみわたる頃と相成り候。幸に越えては來つる難關の苦辛、お察し下されたく候。殊にアルプ天險の横斷は難中の難、冒險中の冒險にて候ひき。

雲外萬里、見あぐる幾重の峻岳、天を摩してそそり立ちつつ、遠く伊太利の國境數百里を圍み、さながら宇宙はここに劃せられたるかの感これあり候。仙鶴の風に乘るは知らず、天人の雲に駕するは知らず、梢を傳ふ猿猴の手もなほ攀づべからず、嵐に翔る暴鷲の翼もまた

(一) Hannibal.
(B. C. 247-183)

(二) Roma.
(Rome.)

(三) Carthage. (三) Aegates. (Aegadian.)
シチリア島の西。西紀前二四一年この島の邊にてカルタゴの艦隊全滅す。

越えゆくべからず。

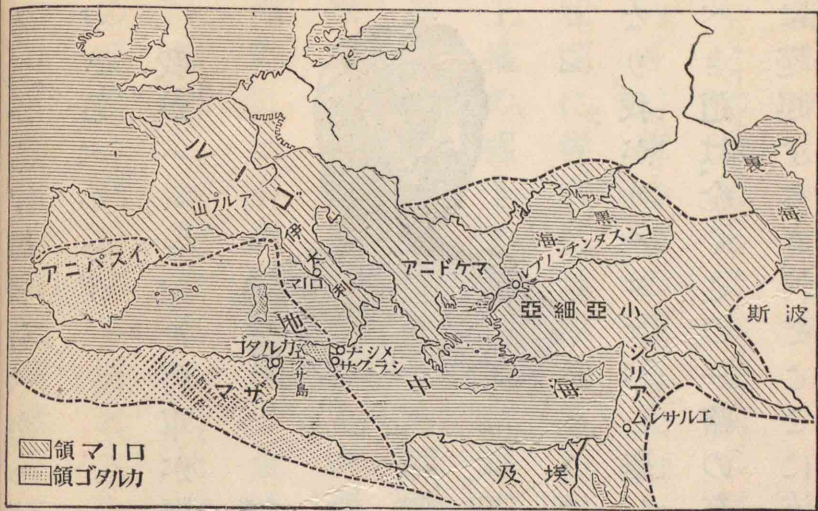
この擧もとより空前の冒險たり。されど我がハンニバル將軍のこの擧は、止むを得ざるに出でたる懸命の壯圖に候。我に地中海をわが物と横行したる昔日の海上權の強きあらば、我に地中海沿岸を壓したる昔日の海軍力の大きいなるあらば、羅馬城下の盟、いかでこの懸軍萬里の遠征に俟たんや。悲しいかな、エガテズ島邊の海戰に我が艦隊の殆ど全滅し去つてより、海上權は全く羅馬に掌握せられて、地中海上は、この二十一年間敵軍の縦横に闊歩する所となり果て、今日のカルタゴは頼むべき艦隊を有たず、渡るべき海のあらざるなり。海渡るべからず、艦頼むべからず、しかも羅馬は是非に一撃せざるべからず。

我がハンニバル將軍が懸命の壯圖によつて、海なく艦なき我がカルタゴは、今こそ對岸の敵國に討入るべき道を得たるにて候へ。今日の我がカルタゴはこの行路の外に征騎の進むべき道なきなり。我がカルタゴが一擧して羅馬本國と雌雄を決すべき道は、全くこの一路の存するのみにて候。何ぞここに趁起すべき、何ぞここに遡巡すべき、莞爾として進軍



ルバニハ

なり。我がカルタゴが一擧して羅馬本國と雌雄を決すべき道は、全くこの一路の存するのみにて候。何ぞここに趁起すべき、何ぞここに遡巡すべき、莞爾として進軍



の命を迎へたるは全軍九
 萬決死の士、吹下すアルプ
 の山風に、征旗堂堂と押出
 したる意氣は、誠に天地を
 呑みつくしたる概あり。あ
 はれ天險もし心あらば、拍
 手してこの珍客を迎へた
 るならんと存じ候。
 一步登れば一步更に危
 く、一崖攀れば一崖更に
 峻しく、山は層一層前途を

塞ぎて、我が軍を拒まんとするに似たり。されども人人
 はいつかな動かぬ鐵石心、かたみに勵み勵まされつ、何
 處までもと進み行けば、數萬の蠻民は左右の高峯に群
 りて、我が領土に奇怪なる推參者、一步もゆるさじ、と猛
 り立ちて、亂下する矢石は吹雪まじりの雨霰、面を向く
 べきやうもあらず。さすがに一時は辟易して、ここに露
 營を張らんとせしが、妙案・奇謀に富める將軍は忽ち一
 計を案ぜられ、夜に乗じて、露營を撤して進軍せられぬ。
 そは、蠻民どものをかしさは、晝間のみ活動し、夜は各自
 の小屋に歸りて、高峯の防禦の空しきを探り得たるが
 爲に候。

かくて全軍は、暗澹たるアルプ山谷の深夜、皚皚たる氷雪の光に、道なき道を急ぎ、志したる高峯へと向ひたるが、いかにせん、蜿蜒たる數萬の大軍なれば、全軍未だ登りつくす事能はざるに、天は早くも明けそめて候。蠻民は小屋の眠醒めぬ、彼等の活動すべき時となりぬ。夜は萬物靜止の時と心得たる、彼等の曉起の眼前に、いっしか我が大軍の高峯を越えゆくを見たる、その驚や如何ばかりぞ。その驚はやがて怒となりて現れ候。彼等は山上の大石を搖がして、轉轉落下せしめつ。轟轟たる響は、天柱を折りつくし、地維を碎きつくさんと見えて、凄じさ言ふばかりもあらず。口惜しいかな、崖下の我が

軍は見る見る幾丈の岩石に打倒され、千仞の溪谷に跳飛ばされ、白雪皚皚たりし山谷は忽にして唐紅の血潮の色と變じ、風は血を含みて腥きが中に、轟轟たる落石の響に混る人人のをめき叫ぶ聲、慘たる當時の光景、暫しはこの世の天とも覚えざりし一行の心情、とても申し盡す筆も詞もこれなく候。我も人も征路の露とは固より覺悟したる命にはあれども、名もなき蠻民の、かかる虎狼の毒牙にかかりて斃れたる幾萬の同胞が無念の精靈は、さこそ妄執の鬼と迷ふらめ。いてや同士が弔戰、蠻人どもを鏖にもと一度は思ひはやりもしつれど、當の敵は羅馬にあり、志す

は敵の不意に在り、一刻も猶豫すべきにあらずと思ひ返し、戀しき同士の墳墓となれる山谷に暫し目禮の別れを告げつつ、その山を辭すれば、前山は我等を迎へて更に高く、溪路は我等を待ちて更に峻しく、蠻人は我等を遮りて更に頑強、かかる峻難の間を苦闘奮進する事八日間、辛うじて全軍アルプ絶頂の天風に覺えず快哉の聲を揚げたりしは、實に九日目にて候ひき。天外萬里の空、遠く茫茫たる伊太利の平原を瞰下したりし時の愉快さ、御察し下されたく候。覺えず戈を振ひて躍り下らんかと狂はれたりし程に候。

一七 アルプ山越下

全軍の士氣はここに新に、全軍の意氣は既に伊太利の平原を呑み、全軍の心は既に羅馬の都門に城下の盟を待つばかりに候。されどアルプ天險の飽く迄も羅馬最頂に作られたる憎さは、伊太利に面したる方は亂山一層峻嶮を競ひ、加ふるに氷雪を以て被はれたれば、これを下らん危さは、これ迄に勝る冒險にて候ひき。猛虎の如き巖は風雪に逆らつて咆哮し、削れるが如き山骨は此處に數丈、彼處に幾丈、しかも氷雪に研ぎすまされたるをや。一步を誤れば萬事休す。眼下の谷は千仞の口を開きて我等を呑まんと待受けたり。過つてこの非運

に陥りたる者も少からず、戈を杖に、踏みしむる足もと
半ば滑りつつ此處を下れば、積雪は又前途を埋めて山
谷を辨せず、一步誤れば身は萬丈雪底の屍、此處にても
一行の葬られたるもの少からず候。
嶮又嶮、慘又慘、命は天に託して、只管に進みゆきたる
に、見上ぐれば中天に入る絶壁、見下せば地底に沈む斷
崖、路は此處に絶えて、行くべき方も無くなり候。ここに
なほ勇を鼓して、この窮路に先導を試みんとしたる一
隊の兵は、空しく悲壯なる最期を遂げて復歸らず、人既
にかかり、ましてや幾多の馬隊をや象隊をや、到底これ
を遣るの道なき事とはなれり、さてもやは争て止むべ

*Aosta.

き、決死の全軍はここに岩を毀ち山を裂きて、行路を開
通する事と相成り候。天險改造の工事後、人若し聞かば
壯快の感多からん、されど當時の我が軍は、只只苦痛に
悩む外はあらざりき、難境かくの如くなれば、ここに露
營すること三日間、寒風は肉を劈き、氷雪は骨を刺すが
中に、一片の火の温むるなく、寸分の蔭の掩ふ物なくし
て、吹きさらされし程の苦痛は、なかなかに来し方に勝
る辛さにて候ひき。かくて虎口を逃れ出でしかど、嶮難
はなほ此處に盡きずして、到る處に我が軍を苦しめ、辛
うじて麓近きアオスタの里に着きたるは、それより三
日目の事に候ひき。

(-)Ticnio.
(=)Trebis.

冒險中の大冒險、アルプの横斷の遂にここに遂げられたる嬉しさ、一時は夢かと怪しむばかり、御察し下されたく候。日を費すこと十五日、九萬の大軍中、残れるは僅に二萬の歩兵と六千の騎兵とに過ぎず。この二事以てその慘澹たりし壯舉の情況を示し盡したりと存じ候。生残りたる者は肉落ち骨瘦せて、只見る餓鬼の群に異ならず、餓鬼よ、餓鬼よ、羅馬の血に飢ゑたるカルタゴの餓鬼にこそ」と、互に笑ひ興じたる次第に候。
このカルタゴの餓鬼は、突如としてアルプ天險を破りて、伊太利の平原に荒れいてたるなり。敵の驚は察せらるるばかりにて、チチノ河邊、トレビア河頭の戦捷よ

(三)Trasimeno

り、更に進みてトラスシメノ湖畔の大勝、我がハンニバル將軍の壯圖は着着その成功を示し得て、天運未だカルタゴを離れざるかと思へば、そぞろ嬉し涙の止めかねて候を硯に受けて、あらあら申し述べ候。(鹽井雨江)

一八 菜色

人物。子路と子鶯との二人ともに孔子の弟子。
場處。孔子の宅。

子路「やあ。」

子鶯「久しぶりでお目に懸りましたな。」

子路「つい彼此して逢へませんでした。今日、先生は御留守で

すか。

子鷲「お出かけの様です。私もつい今し方参つたの**だ**すが、今日はひつそり致してゐます。」

子路「如何です、相變らず御勉強ですか。」

子鷲「駄目です。ね。努力は致して居る積りですが、なかなか**涉**歩ハカトルしく進みません。」

子路「焦つてはいけません、一步一步踏占めて行かねば駄目ですから。ね。私などもつい先へ先へと心が走つて困りますよ。」

子鷲「貴方などは、もう十分修養が出来ておいてですから結構です。」

子路「どうしてどうして御承知の通り、私は例のかつとする性分です。いや、これまで先生からどの位お叱りを受けましたことやら、まあ叱られ通しと言つてもよい位です。年齒しばかりは一人前食つて居りますが。」

子鷲「そんなことはありません。私など實に話になりません。」

子路「貴方などは未だ若いんだから、これからぐんぐん伸びて行きますよ。」

子鷲「いや、どうも色々な邪念よこしまが起りまして、道に即した行が妨げられ勝ちです。」

子路「さうですか。それでも、何時ぞや、先生は大變貴方のことを賞めて居られましたよ。」

子鶯「私をですか。私など賞めて戴くやうな行があるものですか。」

子路「いや、先日も貴方の親孝行を賞讃して居られました。」

子鶯「お恥しいことです。」

子路「本當ですよ。貴方の親孝行は評判なんですよ。」

子鶯「夫は誤です。私などがどうして親孝行などと言へませう。親達に常に不満な心ばかり懷かせて、濟まぬことと始終悔いてばかり居ります。併しこれから段段私も徳を磨いて行つたら、親達へ少しは孝行らしいことも出来ませうかと心懸けては居りますが。」

子路「貴方の様な方が孝行でないと云へば、世間に孝行な人はあり得ませんね。」

子鶯「いえ、全く駄目です。そんなことを言はれると、穴へても這入りたくなくなります。」

子路「本當に貴方は美しい心がけてすな。ああ、さうさう、斯うして貴方のお顔を見て居たらふと思ひ出したことがあります。」

子鶯「何ですか。」

子路「妙なことを思ひ出しました。貴方が先生の處へ始めて來られて、入門を願はれた時、失禮な申分ですけれど、あの頃には健康でも損ねて居られたんですか。」

子鶯「入門の頃、大分久しい以前のことですな。いや、格別病氣

などしてゐた記憶はありません。病氣でもあるやうに御目に止つたのでせうか。」

子路「あの當時、さうです、入門なすつてから可なり久しい間、非常に貴方の様子と言ひ、顔色と言ひ、何だか憔悴しきつて、所謂病色菜色有りといふ様子であつたことを、今どうした拍子か不圖思ひ浮べました。」

子鶯「成程、さうであつたかも知れませんが、いや確にさうだつたに相違ありません。」

子路「それが、近頃は何時御目に掛つても、そんな面影は何處にも見られなくて、如何にも輝かしく、所謂芻豢の色ありとでも申したいのです。」

子鶯「確にさうでせう、さうあるべきだと自分にも思ひ當ります。」

子路「どういふ理由ですか。」

子鶯「貴方には大抵お察しのつくことと思はれますが。」

子路「左様です、何故でせう。」

子鶯「私が先生の處へ入門しました頃には、先生から色色と道に就てのお話を承つて、まあ心ひそかに楽しんで居たのです。親孝行のお話や、古の聖王の遺された尊い道や、さういふものを聞いて居ると、世間的名譽や地位や財産などから心が離れて、好い氣持になつてゐました。ところが、たまたま外へ出て、貴族や富豪達がきらびやかな様子

をして、馬車など驅つて居るのを見ますと、つい又そんな物に對する慾望が浮み出て来て、世間的な野心が頭を擡げてなりませんか。だからお恥しい事ですが、道を樂しむといふ願と、少しは道から離れても世間的に成功したいといふ下卑た慾望とが常に闘つて居りました。この矛盾した二面の生活のために随分惱まされました。ですから、その頃は變な不安定な落着のない様子であつたらうと思ひます。

子路「成程、さうですか。」

子齋「ところが、斯うして絶えず先生の感化を蒙つて、道に即する心が深められて行き、又一つには貴方方の鞭撻を受けるお蔭で、私の心の中に道を中心としての世界が展がつて參りましたので、近頃はどんな華華しい世間的の物を見ましても、さしたる動搖を感じない様になりました。前に散散苦しんでゐた矛盾から、漸く脱却しさうになりました。それで、私の心は始終どうにか平和を持續する事が出来るやうに思ひます。」

子路「なる程、さうでせう。ゆつたりした貴君の此の頃の様子が、それで明瞭に分りました。心持の變化は恐しいものですね。」

子齋「でも、まだまだ油斷は出来ません。隙に乗じて、私の心を破壊するものが何時這入り込まないとも限らない氣が

致します。

子路「さうです。お互に不斷の努力をせねばなりません。」

子禽「どうぞ一層の御鞭撻を願ひます。」

子路「私こそ、どうぞ今日は大變結構なお話を聞かせて戴きました。」

子禽「いいえ、お恥しいことです。」

子路「先生はまだ御歸りではないやうですね。」

子禽「さうのやうです。」

子路「では私は出直して來ることに致しませう。」

子禽「私もさう致しませう。」

子路「ぢや、その邊まで御一緒に參りませうか。」

子禽「お供致しませう。」（孔子とその徒に據る）

一九 門生に諭す

諸君の如きは春秋に富み、材力に足る。若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、只孜孜汲汲として勉めて息まざるにありぬべし。もし悠悠として日を涉り、一旦年老い、齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でて、いかに悔ゆとも何の益あるべき。即ち、今余が身の上にて候。されば古詩にも、
少壯不努力、老大徒傷悲。

といひ、陶淵明も、

*名は潛。晉の詩人。 (1015-110)

朱熹。宋の大儒。

盛年不重來。一日難再晨。及時當勉勵。歲月不待人。
といへば、古人もこの感懷を同じうすとぞ見ゆる。此等の詩句、時時吟詠して勇進の氣を振ひ起すべし。又、世に傳ふる朱文公の勸學の文に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣。歲不我延。嗚呼老矣。是誰之愆。

晉の人。陶淵明の曾祖父。

言簡にして意も明白なり。折節打誦して自ら警むるによかるべし。それよりも余が常に愛するは陶侃が語なり。
大禹聖人、乃惜寸陰。至於衆人、當惜分陰。豈可佚遊荒廢。生無益於時。死無聞於後。是自棄也。
といへるこそ學者志を立つる法とすべきなれ。前にいへる

淵明が詩も、曩祖以來の家法にこそと思はる。

凡そ人と生れて學に志ありといふきは、の生きて時に益なく、死して後に聞ゆるなく、草木と同じく朽果てんはいと口惜しかるべきことなり。されば諸君もこの陶侃が語をもて自ら激勵して、日夜勤勉せらるべし。

但し學は勇進を喜ぶと雖も、また急迫なるを嫌ふとかく、一生ここを離れぬ事なれば、急迫にして求むべきにあらず。ただ懈を戒めて、常に聖賢の書に優游涵泳しなば、久しうして自ら進益あるべし。余、昔、加賀にありし時、士族の中に紹鷗^(三)。利休^(四)が風流を慕ひて茶湯を好む者あり。江戸に行役する時、道中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ、炭をおきて楽しみ

武野氏。利休の茶道の師。
千宗易。茶道千家流の祖。

としけるを、同行の人見て、いかに好けばとて、道中にては止めよかし。といへば、その人いふは、道中とて一生の外にあらばこそ、これも一生の日數の中なれば、わが茶湯をする日にあらずといふ事なし。家にあると何ぞ異ならん。とて、その後も止めざりき。學者の道に志すも、この人の茶湯を好むが如くなるべし。(室鳩巢—駿臺雜誌)

二〇 玄白の感謝上

(一) Capitein. (蘭)
船長

長崎表での蘭館への出入は、常法があつて、かなり厳しく取締られてゐたが、加比丹が江戸に逗留中の旅宿である長崎屋への出入は、暫くの間、事として、自然、何の構もなき姿で

(二) Holland.

蘭醫

あつた。随つて阿蘭陀流の醫術・本草・物産・究理の學問に志ある者を始め、好事の旗本・富商の輩までが、毎日のやうに長崎屋に押しかけた。



杉田玄白

或日の朝、杉田玄白は、他の人人が來ぬ前に自分一人て通辭の西善三郎に會ひたいと思つて、新大橋の中屋敷を早く出て、本石町三丁目の長崎屋源右衛門方に着いたのは、まだ巳刻を少し廻つたばかりの時であつた。彼は阿蘭陀文字を讀まうといふ自分の宿願を述べて、その志願の可能不可能を善三郎に質したかつ

たのである。

ところが、顔馴染の番頭に案内されて、通辭西善三郎の部屋へ通つて見ると、昨日と同じやうに、前野良澤が、もうとつ

くに來たと見えて、悠然と坐つて

ゐた。誰も來ぬうちにと思つて、昨

日よりは半刻も早く來た玄白は、

良澤が自分よりも早く來て居る

のを見て驚いた。

玄白は善三郎に挨拶をすます

と、良澤の方を振向いて、お早う。昨日は失禮致し申した。」と挨拶した。併し、良澤は光澤の好い總髮の頭を軽く下げただけ



前野良澤

で、その白皙な鼻の隆い、薄菊石のある大きい顔をにこりと
もさせなかつた。人に對して傲然たる此の態度は今に始ま
つたことではなく、玄白は日頃から軽い反感を以て良澤を
見てゐた。けれども、良澤に介意し過ぎる自分の心持をも、深
く恥ぢずには居られなかつた。

玄白は不快の感を抑へて、良澤ただ一人しか居ないのを
せめてもの幸に、善三郎に對つて自分の素志を述べた。

「西氏、今日は、ちと御邊に折入つてお尋ねしようと思ふこ
とが御座るのぢや。それは餘の儀では御座らぬ。總體、阿蘭陀
の文字と申すものは、われら他國の者にも讀めるもので御
座らうか。それとも、如何ほど刻苦致しても讀めぬもので御

座らうか。有りやうに御答へ下されい。われら存ずる仔細も御座るほどに。」

玄白の間には眞摯な氣が充ちてゐた。西は玄白の熱心を嘉するやうに二三度肯いたが、彼の與へた答は全く否定的であつた。彼は特有の快活な調子で答へた。

「さればさ。それは三四の方方からも尋ねられた事で御座る。なれど、われら答へ申すには、只、無用になされと申す外は御座らぬ。いかほど辛勞なされても、所詮及ばぬ事で御座る。有りやうを申せば、われら通辭の者にて、阿蘭陀の文字を心得居る者は、われら一兩人の外は頓と御座らぬ。餘の者は、音ばかりを假名で書留め、口づから諳んじ申して、折折の御

*Matoross. (蘭)

船員。

用を辨じ居るので御座る。かの國の言葉を一一に理會致さうなどは、われら他國人には所詮及ばぬ事で御座る。一例を申さうなら、かの國の加比丹又はマダロスなどに、湯水又は酒を飲むを何と申すかと訊ね申すには、最初は手眞似にて問ふ外は御座らぬ。茶碗などを持添へ、注ぐ眞似を致し、口に付けてこれはと問へば、ドリンクキと教へ申す。ドリンクキは飲む事と承知致す。ここまでは仔細は御座らぬ。なれど、今一足進み申して、上戸と下戸との區別を問はうには、はたと當惑致す。屢、飲む眞似を致して上戸の態を示し申しても、相手には頓と通じ申さぬ。又多く飲んでも好まぬ人あり、少しく飲んでも好む人あり、形だけにては上戸・下戸の區別は頓と付

き申さぬ。かやうに情の上のことは、如何様に手眞似を盡しても問ふべき仕方は御座らぬ。

「なるほどな。御尤もて御座る。」

と、玄白は相手の返事の道理を肯かねばならなかつた。

二二 玄白の感謝下

ところが、玄白が首肯するのを見ると、西は稍得意になつて語り續けた。

「阿蘭陀の言葉のむづかしき例には、かやうな事も御座る。アインテレッケンと申す言葉が御座る。好き嗜むといふ言葉で御座るが、われら通辭の家に生れ、幼少の折よりこの言

葉を覚え、幾度となく使ひ申したが、その意は一向悟り申さなんだところ、年五十に及んで、この度の道中にて、やつと會得致して御座る。アインは元といふ意で御座る。テレッケンとは引くといふ意で御座る。アインテレッケンとは、向うの物を手許へ引きたいと思ふ意で御座る。お茶を好むとは、お茶を手許へ引きたいといふ意で御座る。故郷をアインテレッケンするとは、故郷を手許へ引寄せたいほどに懐しむといふ意で御座る。かやうに一つの言葉にても、むづかしきものに御座れば、われらの如き、幼少より阿蘭陀人に朝夕致し居る者にても、なかなか會得致しかねて御座る。況や江戸などにおはしては、所詮叶はぬことで御座る。既に御存じても

昆陽と號す。徳
存府の儒者。

御座らうが、青木文藏殿など、御用にて年年當旅館へお越し
なされて一方ならず御出精なされても、はかばかしう御合
點も參らぬやうて御座る。その許も、左様を思ひ立ちは必ず
御無用になされた方が宜しからう。」

西は自分自身も疾くに諦め切つて居るやうな調子で話
した。

「なるほど、道理で御座る。」

再び、玄白は、さう答へる外はなかつた。相手が切に止める
のに、強ひて學習の方法などを聞く譯にも行かなかつた。

「なるほど、大通辭の御邊が左様に思うて居らるる事を、わ
れらが如何やうに思ひ立つても及ばぬ事で御座らう。所詮

は思ひ切る外は御座るまい。」

玄白が何氣なくさう言つた時であつた。今まで緘黙して、
西と玄白との問答を聽いてゐた良澤が、突如として口を挿
んだ。

「いや、御兩所のお言葉では御座るが、我等の存ずる仔細は
別ぢや。凡そ紅毛人とは申せ、同じ人間の作つた文字、書籍が、
同じ人間に會得出来ぬといふ道理は、更更御座らぬ。我等が
平生讀書き致し居る漢字、漢語も、又我等士大夫が實踐致し
居る孔孟の教も、傳來の初には、只今の阿蘭陀の文字同様に
一切不通のものであつたに相違御座らぬ。それを、我等の遠
つ祖どもが刻苦いたして、一語半語づつ理會致して參つた

に相違御座らぬ。遠つ祖どもの苦心があればこそ、二千年この方、幾百億の人人がその餘澤に潤うて居るので御座る。良澤の志は其處で御座る。我等はこの後に來る者のためには、**彫心鏤骨の苦しみ**も更に厭ひ申さぬ覺悟で御座る。杉田氏もお志をお捨てなされいて、お始めなされい。我等は今年四十九で御座るが、倒れるまで努めて行く積りて御座る。

玄白は良澤の志を聽いて、衷心から恥しく思つた。けれども同時に、彼は餘りに觸れられたくない急處に、相手が唐突に無遠慮に觸れて來た事には、多大の不快を感じた。此方が西に對して挨拶旁言つて居るのに、何の容赦もなく、眞劍に向つて來た相手に、ある烈しい不快を感じたのである。とは

(一)Frock-coat.
(二)Melton.

言ふものの、良澤の雄渾な志を聽いては、いたく恥入つた。否、それだけに止まらず、なほ進んで、彼は之を自分に對する有り難い忠言だとさへ思つて、深く感謝した。さうして、自分も更に一層奮勵せねば已まぬといふ心が激しく湧起るのを、涙ながらに覺えた。(菊池寛の「蘭學事始」に據る)

一一二 元 日

雑煮を食つて、書齋に引取ると、暫くして三四人來た。いづれも若い男である。その中の一人がフロックを着てゐる。メルトンに對して妙に遠慮する傾がある。あとの者は皆和服で、且つ不斷着の儘だから、頓と正月らしくない。この連中が

フロックを眺めて、「やあ」やあ」と一つづつ言つた。みんな驚いた證據である。自分も一番あとで、「やあ」と言つた。

フロックは白い手巾を出して、用もない顔を拭いた。さうして頬に屠蘇を飲んだ。他の連中も大いに膳の物をつついてゐるところへ、虚子が俵で來た。これは黒い羽織に黒い紋附を着て、極めて舊式である。あなたは黒紋附を持つてゐますが、やはり能をやるからその必要があるんでせう。」と聞いた。虚子が「ええ、さうです。」と答へた。さうして、「一つ謠ひませんか。」と言ひだした。自分は、謠つてもよう御座んす。」と應じた。それから二人して、「東北」といふものを謠つた。餘程以前に習つただけで、殆ど復習と云ふことをやらないから、處處甚

伴人、高橋氏。

謠曲の一。

だ曖昧である。その上、我ながら覺束ない聲が出た。漸く謠つて了ふと、聞いてゐた若い連中が、申し合せたやうに、自分をまづいと批評した。中にもフロックは、あなたの聲はひよろひよろしてゐる。」と言つた。この連中は謠の「う」の字も心得ない者どもである。だから、虚子と自分との優劣はとても分らないだらうと思つてゐた。併し批評をされて見ると、如何に素人の批評でも、寸分の誤もないのだから、已むを得ない。馬鹿を言へといふ勇氣も出なかつた。

すると、虚子が近來鼓を習つてゐるといふ話を始めた。謠の「う」の字も知らない連中が、「一つ打つて御覽なさい。是非御聞かせなさい。」と所望してゐる。虚子は自分に、「ちや、あなた謠

つて下さい。」と依頼した。これは離の何物たるを知らない自分
分にとつては甚だ迷惑でもあつたが、又斬新といふ興味も
あつたので、「謠ひませう。」と引受けた。虚子は車夫を走らして、
鼓を取寄せた。鼓が來ると、臺處から七輪を持つて來さして、
かんかんいふ炭火の上で鼓の皮を焙り始めた。みんな驚い
て見てゐる。自分もこの猛烈な焙り方には驚いた。大丈夫で
すか。」と尋ねたら、「ええ、大丈夫です。」と答へながら、指の先で張
切つた皮の上を「かん」と弾いた。一寸好い音がした。もう宜し
いでせう。」と、焙るのを止めて、鼓の緒を締めにかかつた。紋服
の男が赤い緒をいぢつてゐる所が、何となく品が好い。今度
はみんな感心して黙つて見てゐる。

虚子はやがて羽織を脱いだ。さうして鼓をかい込んだ。自
分は少し待つてくれと頼んだ。第一、彼が何處いらて鼓を打
つか見當が付かないから、一寸打合せをしたい。虚子は、ここ
で掛聲を幾つ掛けて、ここで鼓をどう打つから、御遣りなさ
いと懇に説明してくれた。自分にはとても呑込めない。けれ
ど合點の行くまで研究してゐれば、二三時間はかかる。已む
を得ず、好い加減に領承した。そこで「羽衣」の曲を謠ひ出した。
「春霞たなびきにけり」と半行程來るうちに、どうも出が好く
なかつたと後悔し始めた。甚だ無氣力である。けれども、途中
から急に振ひ出しては總體の調子が崩れるから、萎靡・因循
の儘、少し押して行くと、虚子が矢庭に大きな掛聲をかけて、

*
謠曲の一。

鼓を「かん」と一つ打つた。

自分は、虚子が斯う猛烈に來ようとは、夢にも豫期してゐなかつた。元來が優美な悠長なものとはばかり考へてゐた掛聲は、まるで眞劍勝負のその様に、自分の鼓膜を驚かした。自分の謠はこの掛聲で二三度波を打つた。それが漸く靜まりかけた時に、虚子が又腹一杯の聲で横合から威嚇した。自分の聲は威嚇される度によるよるする。さうして小さくなる。暫くすると、聞いてゐる者がくすくす笑ひ出した。自分も内心から馬鹿馬鹿しくなつた。その時、フロックが眞先に立つて、どつと噴出した。自分も調子につれて一緒に噴出した。それから散散な冷評を受けた。中にもフロックのは最も

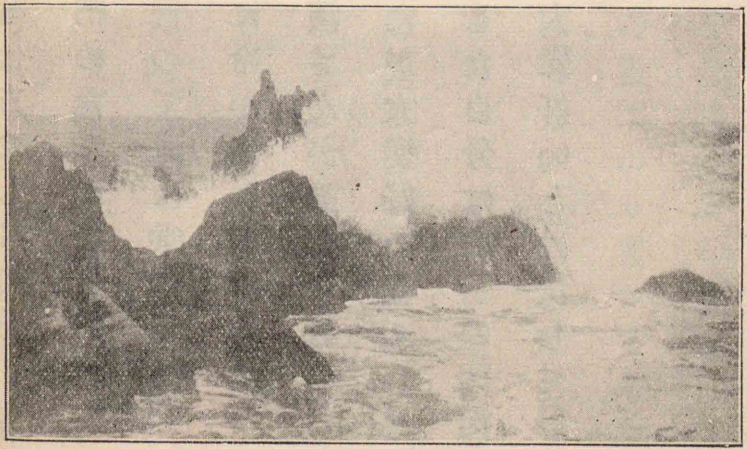
皮肉であつた。虚子は微笑しながら、仕方なしに自分の鼓に自分の謠を合せて、めでたく謠ひ納めた。やがて、まだ廻らなければならぬ處があるからと言つて、俚に乗つて歸つて行つた。後から又いろいろ若い者に冷かされた。細君までが一緒になつて夫をくさした末、高濱さんが鼓をお打ちなさる時、お襦袢の袖がびらびら見えたと、大變好い色でした。と賞めてゐる。フロックは忽ち賛成した。自分は、虚子の襦袢の袖の色も、袖のびらびらする所も、大變好いとは決して思つてゐない。(夏目漱石)

一一三 海と岩

空は次第に紫色に濁りて、生温き南風面を吹きぬ。漁夫等が濱に走り出て來りて、せはしく網を收むるほどに、雨ばらばらと降り來りぬ。

雨はやがて止みぬ。風は愈、吹募る。眼を上ぐれば、墨をちらせる、インキをほかせる、紫色に汚れ、銀色に朧に、様様の態を盡せる雲、満天に染み、融け、渦まき、富士も天城も隠れぬ。

凄きまで、黙然と暗める海は、宛



海 怒

ら力士の怒れるが如く、千丈の底より鳴り吼えつつ、一波又一波、岩を乗越え、濱を呑み、断えず休まず、鞆として陸を目がけて押寄す。

見渡せば海に一の帆影なし。唯、大鷲の嘴をあげ翼を張れるが如き名島の孤岩の、獨り大濤をかぶり、白煙を蹴散らしつつ、屹として萬波の海の中に立つあるのみ。

ああ、海よ、爾の怒は偉大なり。されど、ああ、岩よ、爾の意力も亦偉大なり。古の大人も曾て爾が如く天を仰ぎて永遠を思ひ、一世を敵として孤高の戦を續けたりき。

風は猶止まず、海は益、哮りぬ。千波又萬波、碎けても碎けても、又寄せ來る。彼方の海上に斗出して、剛健、素朴、褐色の衣を

相模國三浦郡逗子町の沖合にあり。

相模國三浦郡逗子町に屬す。
北條時宗。

着けて一點の青を帯びず、どつかと腰を据ゑて、攻寄する海に向ふ小坪の岬を見ずや人をして當年の相模太郎を想はしむ。(徳富蘆花―自然と人生)

二四 詩三篇

一、無人島

汝はこれ大渡津海の名無し小島
人住まず草木も咲かず
寄せくるはただ荒浪

たまたまに旅ゆく小島

疲れたる翼やすめて
憩ふ日のなきにあらねど
たちまちに翔りも去りて
再びは還り來らず

汝はこれ大渡津海の名無し小島
汝がよろこび汝かうれへ
知る人もなし
寄せくるはただ荒浪(某畫家の作に據る)

二、椰子の實

名も知らぬ遠き島より
 流れ寄る椰子の實一つ
 ふるさとの岸を離れて
 汝はそも浪に幾月
 もとの樹は生ひや茂れる
 枝はなほ蔭をやなせる
 われもまた渚を枕
 ひとり身の浮寝の旅ぞ

實をとりて胸に當つれば
 あらたなり流離の憂
 海の日の沈むを見れば
 たぎり落つ異郷の涙
 思ひやる八重の潮路
 いづれの日にか國に歸らん (島崎藤村)

三、 櫟 林

早春のしづかな櫟林の奥
朽らのこる去年の落葉の上に
まばらな日光は
家畜だちのやうに愛らしく遊ぶ

* Emerald.
鮮綠色。

梢梢の透徹るエメラルドの若芽は
嬰兒の初のほほゑみのやう
廣い廣い蒼空に
溶けいるやうに煙つて居る
此處は私の夢みる樂園のやうだ

どんなに遙遙と再び微風は
美しい白雲に數數の春の香料や珍味をのせて
孤獨な私の食卓を訪れるだらう (國木田虎雄)

二五 自然の愛

慈愛深き母の懷に養はれたる子は、生涯其の恩愛を忘れず、日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美・溫雅なる山川は常に臉上に愛を湛ふるがごとし。接する者はこれに親しみ、親しむ者はこれを慕ふ。愛に迎へらるる者は愛に酬いざるを得ず、天然の大公園に棲むわが國民が、その一木

* Canbeia. (葡)
この語の轉訛
なりといふ。

一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の縁日に張りたる夜店には、食品も玩具も數ふるに足らず、露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅、カンテラの光に映えて水水しく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買求めて、座敷に飾り庭に植込む、裏長屋の道具の据ゑどころもなき窓前にも、稗詩を作りて田舎の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐の芋を育てて優しき野趣を樂しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し上下貴賤を通じて、自然を愛すること此の如きは、他の國民にその匹ありや。

我が國民は自然を愛賞する餘り、またよく之を尊重せり。

尊重するものには悦んで服従す。彼等は漫に人工を加へずして自然を仰ぐ。この服従を以て屈伏といふ勿れ、屈服は他動的なり、悦服は自動的なり。屈伏する者は、不束なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如し、悦服する者は、從順なる兒孫が寛仁なる家長を見るが如し。任意的なるものは、毫も抑壓の念を其の間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。花を愛する趣味の、如何に我等が西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美しきにあらず、花一輪の色の艶に香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するよりも、峯に互り川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如く

し、日本人は葉も枝も其のままに、願はくはこれに置く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡興を助くるに、一は床上の盆石盆栽に自然の大景を方寸に寄す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じく菊を見るも、彼は色を重んじ、此は風致を主とす。西洋草花の多くは、其の葉に何の趣もなくして、其の花に妖艶の色あり、寧ろ我等の眼には毒毒しと感ぜらる。秋の野の女郎花尾花、其の花に何の美しきことかある。されど、あるかなきかの黄花を捧げて、なほたよたよと、下蔭の蟲の音にもゆらぐ様、ますほの色のやがて白くほほけて、霧に濡れ、風に靡く趣は、我が胸に沁みて忘れられず。

抑、日本人が花を愛するは、其の外形にあらず、賦色にあらずして、其の風情にあり、直に自然の懷に分入りて、その眞意義を握るにあり。かくしてこそ、自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむ事の深きは、これ日本國民の特性なり。

(藤岡東圃—國文學史講話)

二六 無線電信

日本に通じる無線電信は今晚ておしまひだと、無線電信係の人が注意に来てくれた。

「カウカイブジ」といふやうなものが、幾つも幾つも繰返さ

れて居るのである。自分も父母を喜ばせる爲に、何か一言いひ送らうと思つたが、無事といふ以外に言ひたい事は何も無いが、ただ無事といふだけでは甚だ物足りなさ過ぎるで、手帳を披いて、あれこれと近頃の自作の歌の中から適當なのを選ばうと思つた。

香川氏。徳川時代後期の傑出せる歌人。

景樹の流を汲んで和歌を好む母は、自分達兄弟姉妹が、時折父母の家を離れて旅にても出た時、或は母自身が家を留守にした時には、必ず自分達に對して、子を思ふ親の情を三十一文字に籠めて書送つてくれた。見やう見真似て、兄も姉も幼い時から歌を詠みならひ、母から送られた時には返歌を贈るといふ風であつた。自分も何時かそれに倣つて、旅好

きの身の旅先から、強ひても母の好きさうな古風な歌を詠みだしては書送るのを習とした。

ちやうど此の夏も、自分は拙い歌ながら、それを認めた行く先先の驛路の繪端書が、いかばかり母を慰めるかを思ひ、又知る人の訪ひ來るままに、いかに誇りに人人の前に母がそれを示すかを想像しつつ、九州路の旅に日を暮した。

併し、今、自分の手帳には旅の歌が一首も無い。船に乗つてからも、時折は、切れ切れに浮ぶ感想を詠まうと力めはしたけれども、どういふものか、どうしてもそれが纏まらないのであつた。且つ正直に書留められたその切れ切れの感想は、何れも、故郷を去り、父母の家を離れて、伸び伸びとした心持

を感じるといふやうな句ばかりで、それが鉛筆の痕さへも鮮かに目に映るのである。

父母の家を離れし氣やすさを旅に知る身もはかなかりけり

といふのが、傍に疑問點をつけたまま、僅に纏まりかけてゐる一首であつた。けれど自分が父母に送るべき歌はそんなものではない。なるべく心配させないやう、海上の平穩な事を知らせ、併せて父母の家を片時も忘れないといふ意味を含ませなければならぬ。

こんな事に迄も、自分は善い子になり濟まさうとする根性に、何時の間にか化してゐた。喜怒哀樂すべてに對して全

くおのれを抑へる事のなかつた自分は、嘗て如何に身内の者の心を亂したらうか。併しその後の、聲あげて笑ふ事なく、拳を擧げて怒る事なくなつた自分が、想像の外の安堵を、彼等の上に與へ得た事は疑もない事である。おのれの功名を語るを好まぬ父さへ、その重い口に如何に屢わが名をのぼせ、知る限の人に今日の自分が昨日の自分でないことを憚りもせず誇つたかと思ふと、自分は冷汗の背を流れる心地と共に、殆ど心にも無い禮儀、挨拶を以て、人を欺き己を欺く不満に伴なふ寂寥と悔恨とに悩むのであつた。

腕力を以て父に抵抗する事をさへ憚らなかつた我が儘な短氣な癩積持は、何時の間にか人に逆らふ事を忘れてし

まつた專横な習慣の桎梏に縛られつつ、敢て束縛を解かう
ともしない世の常の人の心持も、やがては生れながらの性
質とならうとする自分の忍従と殆ど同じいものではない
か。自分は何時の間にか、父母の喜ぶ事を殊更こしらへ上げ
て迄も、目に立つやうに振舞はうと心掛けてゐた。それが頗
る自分に不満を與へ、赴くがままに走らうとする心との抗
争を醸してゐたけれども、何時しかそれが根深く心を領す
るやうになつて了つた。自分は二十四孝の眞似をさへ、機會
さへあれば喜んで學んだに相違ない。
かかる事の切れ切れに心に浮ぶがままに、自分の歌には
一層纏まりがつかなくなり行くのであつた。

幾度も幾度も、短いありふれた句を、手帳に書いては消し
書いては消した後で、あれこれとつなぎ合せて、漸く左の一
首に纏めた。

ヤスラカニウミノイクヨハアケニケリチチハハノ
イヘコロシトオモヘド

自分は、その電報が、恰も晚餐の時刻に我が家へ着くやう
に、無線電信係の人に頼み込んで、それで今日は一層安らか
な心になつた。

父は恐らく一杯の葡萄酒に陶然としながら、なんだつま
らないと云ふやうな顔をして見るに違ない。併し其の心中
の嬉しさは、隠さうとしても隠し切れず、見ないやうな風で

ゐながら、電報の歌を諳んじるに違ない。母はもう堪らなくなつて、目頭に涙を滲ませながら、幾度も幾度も口吟んだ後、妹にも弟にも、さては女中達に迄も讀聞かせるに違ない。明日からは、あの家の夫人、その家の奥様たちに逢ふ度毎に、我が子の歌を唇にのほせるに違ない。自分には其の情景が髣髴するのであつた。(水上瀧太郎の文に據る)

二七 十國峠の眺望

(一) 伊豆國。

(二) 伊豆相模武藏安房上總。

十國峠の登臨は、記念すべき壯快なる遊なりき。この峠は函嶺より天城に連なる、所謂富士火山脈の一峯にて、頂に登れば、關の東西より豆州の沖かけて、十國・五島を眺め得べし

(三) 下總・遠江・駿河・信濃・甲斐・大島・三宅島等。
(四) 姉崎正沖。



とぞ言ふなる。或日の空晴渡りたるに、われ嘯風とここに遊びき。
山の頂は熱海より五十町を出てざれば、いと高しとは言ひ難し。されど相駿二州に跨がりて、北は足柄箱根富士南は天城・神子より大島・三宅の山山を望み、西は江浦・静浦を眼下に見おろし、名にし負ふ田子浦づたひに、清見ヶ關

より三保の松原かけて、遙に遠江なる御前ヶ崎に至るまで、東は眞鶴崎の彼方、小田原・國府津・小淘綾の磯邊、かの江島・鎌倉の山山より、田越・三崎のはてに至るまで、相模灘を包みて、かすかに安房・上總の遠巒を望む。形物の壯大、類ふべきものなし。

殊に美はしきは、江浦より清水に至るまでの田子浦の景色なり。富士の裾野を縫へる小松原の濃き緑なるが、蒲原興津わたり、淡き紫に薄れゆけるさまなど、心ゆくばかり嬉しく、天津少女の天降りけん三保の松原の、春霞にかすめるが、この世ならず見ゆるもゆかし。仰げば高き富士が峯の千古の姿は言ふもおろかや。ああ、誰が造りなしけん自然の美し

さよ。

函根の一峯に雲起りぬ。はじめは膚寸の大いさなりしが、谷ひらけ、風加はりて漸く擴がり、はては八峯の全部を掩ひて、驀然として西の方に棚引きぬ。愛鷹の峯にかかる頃、富士嵐に逆らひたるにや、雲行忽ち天に向ひて劍拔萬丈、二山の間、白雲の壁を築けり。その頂、山風に散じて満天を覆ひ、濛濛として咫尺を辨へず。我は衣襟をあはせて凝視すること多時。嘲風は杖を揮つて天を劃し、快哉を絶叫すること三度、暫くにして空晴れて、函嶺の崔嵬、芙岳の清容もとの如し。

満天の雲霧、我その何處に行きたるかを知らず。ああ、天地風雲多し、人間何ぞ涕涙の繁きや。(高山樗牛)

二八 人買舟上

(LXII)
 ともに今の直江
 津の近傍。

越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十歳を踰えて間もないらしく、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて、草臥れた同胞二人を、もうぢきにお宿にお着きなさいませ。」と言つて、勵まして歩かせようとする。姉は足を引きずるやうにして歩いてゐるが、それでも氣が勝つてゐて、疲を母や弟に知らせまいとして、折折思ひ出したやうに、ヒツケケケ弾力のある足つきをして見せる。近い道を物詣にでも歩くのならふさはしく見えさうな一群であるが、笠や

ら、杖やら、甲斐甲斐しい扮装いんぱうをしてゐるのが、誰の目にも珍しくも氣の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の斷えたり續いたりする間を通つてゐる。砂や石は多いが、秋日和によく乾いて、しかも粘土が混つてゐるために、好く固まつてゐて、海の傍のやうに、くさぶし踝を埋めて人を惱ますことはない。

藁葺の家が何軒も立並んだ一構が柞の林に圍まれて、それに夕日がかつと照してゐる處へ通り掛かつた。

「まあ、あの美しい紅葉を御覽。」と、先に立つてゐた母が指さして子供に言つた。

子供は母の指さす方を見たが、なんとも言はぬので、女中

が言つた。木の葉があんなに染るのでございますから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね。」

姉娘が突然弟を顧みて言つた。早くお父様の入らつしやる處へ往きたいわね。」

「姉さん、まだなかなか往かれはしないよ。弟は賢しげに答へた。」

母が諭すやうに言つた。さうですとも。今まで越して來たやうな山を澤山越して、河や海をお舟で度度渡らなくては往かれないのだよ。毎日精出して、大人しく歩かなくては。」

「でも、早く往きたいのですもの。」と姉娘は言つた、一群は暫く黙つて歩いた。

向うから空桶を擔いで來る女がある。鹽濱から歸る潮汲女である。それに女中が聲を掛けた。

「もしもし、この邊に旅の人の宿をする家はありますか。」潮汲女は足を駐めて、主従四人の群を見渡した。そしてかと言つた。まあ、お氣の毒な。生憎な處で日が暮れますね。この土地には旅の人を留めて上げる家は一軒もありません。」女中が言つた。それは本當ですか。どうしてそんなに人氣が悪いのでせう。」

二人の子供は、はずんで來る對話の調子を氣にして、潮汲女の傍に寄つたので、女中と三人で女を取卷いた形になつた。

「いいえ、信者が多くて人氣の好い土地ですが、國守の掟だから仕方がありません。もうあそこに」と言ひさして、潮汲女は今來た道を指さした。もうあそこに見えてゐますが、あの橋までお出でなされると、高札が立つてゐます。それに精しく書いてあるさうですが、近頃悪い人買がこの邊を立廻ります。それで旅人に宿を貸して足を留めさせた者にはお咎があります。あたり七軒卷添になるさうです。」

「それは困りますね。子供衆もお出でなさるし、もうさう遠くまで行かれませんか。どうにかしやうはありますまいか。」
 「さうですね。わたしの通ふ鹽濱のあるあたりまで、あなた方がお出でなされると、夜になつて了ひませう。どうもそこら

で好い處を見附けて、野宿をなさるより外、仕方がありません。まい。わたしの思案では、あそのこの橋の下にお休みなさるが好いでせう。岸の石垣にびつたり寄せて、河原に大きな材木が澤山立ててあります。荒川の上から流して來た材木です。晝間はその下で子供が遊んでゐますが、奥の方には日も差さず、暗くなつてゐる處があります。其處なら風も通しますまい。わたしは斯うして毎日通ふ鹽濱の持主の所にゐます。つい其處の柞の林の中です。夜になつたら、藁や薦など持つて往つて上げませう。」

子供達の母は一人離れて立つて、この話を聞いてゐたが、この時、潮汲女の傍に進み寄つて言つた。好いお方に出逢ひ

ましたのは、私共の仕合せてございます。其處へ往つて休みませう。どうぞ藁や薦をお借り申したうございます。せめて子供達にでも敷かせたり被せたり致したうございます。」

潮汲女は請合つて、柞の林の方へ歸つて行く。主従四人は橋のある方へ急いだ。

二九 人買舟中

やがて荒川に架けわたした橋の袂に主従四人は來た。潮汲女の言つた通りに、新しい高札が立つてゐる。書いてある國守の掟も、女の詞に違はない。

人買が立廻るなら、その人買の詮議をしたら好ささうなものである。旅人に足を留めさすまいとして、行暮れた者を路頭に迷はせるやうな掟を、國守はなぜ定めたのか。不束な世話の焼きやうである。併し、昔の人の目には、掟はどこまでも掟である。子供達の母はさういふ掟のある土地に來合せた運命を歎くだけで、掟の善惡は思はない。

橋の袂に、河原へ洗濯に降りる者の通ふ道がある。其處から一群は、河原に降りた。なる程、大層な材木が石垣に立てかけてある。一群は、石垣に沿うて、材木の下へ潜つて這入つた。男の子は面白がつて、先に立つて勇んで這入つた。

奥深く潜つて這入ると、洞穴の様になつた處がある。下には大きい材木が横になつてゐるので、床を張つた様である。

男の子が先に立つて、横になつてゐる材木の上に乗つて、一番隅へ這入つて、「姉さん、早くお出でなさい。」と呼ぶ。

姉娘は怖る怖る弟の傍へ往つた。

「まあ、お待ち遊ばせ。」と女中が言つて、背に負つてゐた包を卸した。そして着換の衣類を出して、子供を脇へ寄らせて、隅の處に敷いた。そこへ親子を坐らせた。

母親が坐ると、二人の子供が左右から縋り着いた。岩代の信夫郡の住家を出て、親子は此處まで來る中に、家の中ではあつても、この材木の蔭よりも、もつと外らしい處に寝た事がある。不自由にも次第に慣れて、もうさほど苦にはしない。女中の包から出したのは衣類ばかりではない。用心に持

つてゐる食物もある。女中はこれを親子の前へ出して置いて言つた。ここでは焚火を致すことは出來ません。若し悪い人に見つけられてはならぬからでございます。あの鹽瀆の持主とやらの家まで往つて、お湯を貰つて参りませう。そして藁や薦の事も頼んで参りませう。」

女中はまめまめしく出て行つた。子供は樂しげに粗く粒りやら菓子やらを食べ始めた。

暫くすると、この材木の蔭へ人の這入つて來る足音がした。「姥竹かい。」と母親が聲を掛けた。併し心の内には、柞の林まで往つて來たにしては、餘り早いと疑つた。姥竹と云ふのは女中の名である。

這入つて來たのは四十歳ばかりの男である。骨組の逞しい、筋肉が一つ一つ肌の上から數へられるほど脂肪の少ない、牙彫の人形のやうな顔に笑を湛へて、手に數珠を持つてゐる。我が家を歩くやうな慣れた歩みぶりをして、親子の潜んでゐる奥へ進み寄つて、そして親子の座席にしてゐる材木に腰を掛けた。

親子は只驚いて見てゐるが、仇をしさうな様子は見えぬので、恐しいとは思はぬのである。

男はこんな事を言ふ。わしは山岡大夫と云ふ船乗ぢや、この頃この土地を人買が立廻ると云ふので、國守が旅人に宿を貸す事を差止めた。人買を掴まへる事は、國守の手には合はぬと見える。氣の毒なのは旅人ぢや。そこでわしは旅人を救うてやらうと思ひ立つた。幸にわしが家は街道を離れてゐるので、こつそり人を留めても、誰に遠慮もいらぬ。わしは人の野宿をしさうな森の中や橋の下を尋ね廻つて、これまで大勢の人を連れて歸つた。見れば子供衆が菓子を食べてゐなさるが、そんな物は腹の足しにはならないで、齒に障る。わしが所ではさしたる饗應はせぬが、芋粥でも進ませせう。どうぞ遠慮せずに来て下されい。男は強ひて誘ふでもなく、獨語のやうに言つたのである。

子供達の母はつくづく聞いてゐたが、世間の掟に背いて迄も人を救はうといふ有り難い志に感ぜずにはゐられな

かつた。そこで斯う言つた。承れば殊勝なお心掛と存じます。貸すなと云ふ掟のある宿を借りて、ひよつと宿主に難儀を掛けようかと、それが氣掛りではございますが、私は兎も角も、子供達に温い粥でも食べさせて、屋根の下に休ませる事が出来ましたら、その御恩は後の世までも忘れませう。

山岡大夫は頷いた。さてさて、好う物のわかる御婦人ぢや、そんならすぐに案内をして進ませう。かう言つて立ちさうにした。

母親は氣の毒さうに言つた。どうぞ少しお待ち下さいませ。私ども三人がお世話になるさへ心苦しうございますのに、こんな事を申すのはいかがと存じますが、實は今一人、連がございます。

山岡大夫は耳を敬てた。連がある。それは男か女か。

「子供達の世話をさせに連れて出た女中でございます。湯を貰ふと申して、街道を三四町跡へ引返してまゐりました。もう程なく歸つてまゐりませう。」

「お女中かな。そんなら待つて進ませう。山岡大夫の落着いた、底の知れぬやうな顔に、なぜか喜の影が見えた。」

三〇 人買舟下

ここは直江の浦である。日はまだ米山よんざきの背後に隠れてゐて、紺青のやうな海の上には薄い靄がかかつてゐる。

一群の客を舟に載せて、纜を解いてゐる舟がある。船頭は山岡大夫で、客はゆうべ大夫の家に泊つた主従四人の旅人である。

橋の下で山岡大夫に出逢つた母親と子供二人とは、女中姥竹が缺けた瓶子に湯を貰つて歸るのを待受けて、大夫に連れられて宿を借りに往つた。姥竹は不安らしい顔をしなから尾いて行つた。大夫は街道を南へ這入つた松林の中の草の家に四人を泊めて、芋粥を進めた。そして何處から何處へ往く旅かと問うた。草臥れた子供達を先へ寝させて、母は宿の主人に身の上の凡そを微かな燈火の下で話した。自分は岩代のものである。夫が筑紫へ往つて歸らぬので、

二人の子供を連れて尋ねに往く。姥竹は姉娘の生れた時から守をしてくれた女中で、身寄のない者ゆゑ、覺束ない旅の伴をすることになつたと話したのである。

さて此處までは來たが、筑紫の涯へ往く事を思へば、まだ家を出たばかりと言つても好い。これから陸を行つたものであらうか、又舟路を行つたものであらうか。主人は船乗であつて見れば、定めて遠國の事も知つてゐるだらう。どうぞ教へて貰ひたいと、子供達の母が頼んだ。

大夫は知れ切つた事を問はれたやうに、少しもためらはずに、舟路に行く事を勧めた。陸を行けば、ぢき隣の越中の國に入る界にさへ、親不知子不知の難處がある。削り立てたや

うな巖石の裾には荒浪が打寄せる。旅人は横穴に這入つて、波の引くのを待つてゐて、狭い岩石の下の道を走り抜ける。その時は親は子を顧みることが出来ず、子も親を顧みることが出来ない。それは海邊の難處である。又山を越えると、踏まへた石が一つ搖げば、千尋の谷底に落ちるやうな、あぶない岨道もある。更に西國へ往くまでには、どれ程の難處があるかも知れない。それとは違つて、舟路は安全なものである。慥な船頭にさへ頼めば、おながらにして百里でも千里でも行かれる。自分は西國まで往くことは出来ぬが、諸國の船頭を知つてゐるから、舟に載せて出て、西國へ往く舟に乗換へさせることが出来る。明日の朝は早速舟に載せて出ようと

大夫は事もなげに言つた。

夜が明けかかると、大夫は主従四人をせき立てて家を出た。その時、子供達の母は小さい囊から金を出して、宿賃を拂はうとした。大夫は留めて、宿賃は貰はぬ、併し金の入れてある大切な囊は預かつて置かう。と言つた。なんでも、大切な品は、宿に着けば宿の主人に、舟に乗れば舟の主に預けるものだと言ふのである。

子供達の母は、最初に宿を借る事を頼んでから、主人の大夫の言ふ事を聽かなくてはならぬやうな勢になつた。掟を破つてまで宿を貸してくれたのを有り難くは思つても、何事によらず、言ふが儘になる程には、大夫を信じてゐない。か

ういふ勢になつたのは、大夫の詞に人を押付ける強みがあつて、母親はそれに抗ふことが出来ぬからである。その抗ふことの出来ぬのは、どこか恐しい處があるからである。

母親は餘儀ない事をするやうな心持で舟に乗つた。子供達は凧いだ海の青い毛氈を敷いなやうな面を見て、物珍しさに胸を躍らせて乗つた。ただ姥竹が顔には、きのふ橋の下を立去つた時から、今舟に乗る時まで、不安の色が一度も消せなかつた。

山岡大夫は纜を解いた。棹で岸を一押し押すと、舟は搖ぎつつ浮び出た。

山岡大夫は、暫く岸に沿うて、南へ、越中界の方角へ漕いで

行く。霧は見る見る消えて、波は日に赫く。人家のない岩蔭に、波が砂を洗つて、海松や荒布を打上げてゐる處があつた。そこに舟が二艘泊つてゐる。船頭が大夫を見て呼掛けた。

「どうぢやあるか。」

大夫は右の手を舉げて、拇指を折つて見せた。そして自分も其處へ舟を舫つた。拇指だけ折つたのは四人居るといふ相圖である。

前からゐた船頭の一人は宮崎の三郎と云つて、越中宮崎の者である。左の手の拳を開いて見せた。右の手は貨の相圖になるやうに、左の手は錢の相圖になる。これは五貫文に付けたのである。

「氣張るぞ」と今一人の船頭が言つて、左の臂をもつと伸べて、一度拳を開いて見せ、次いで人差指を立てて見せた。此の男は佐渡の二郎で、六貫文に付けたのである。

「横着者奴」と宮崎が叫んで立ちかかれば、「出しぬかうとしたのはおぬしぢや」と佐渡が身構をする。二艘の舟がかしいで、舷が水を咎つた。

大夫は二人の船頭の顔を見較べた。「慌てるな、どつちも空手では還さぬ。お客様が御窮窟でないやうに、お二人づつ分けて載せて進ぜる。賃錢は跡で付けた値段の割ぢや。」かう言つて置いて、大夫は客を顧みた。「さあ、お二人づつあの舟へお乗りなされ。どれも西國への便船ぢや。船脚といふものは、重

過ぎては走りが悪い。」

二人の子供は宮崎が舟へ、母親と姥竹とは佐渡が舟へ、大夫が手を執つて乗移らせた。移らせて引く大夫が手に、宮崎も佐渡も幾緡かの錢を握らせた。

「あの、主人にお預けなされた囊は」と姥竹が主の袖を引いた時、山岡大夫は既に空舟をつと押出してゐた。

「わしはこれでお暇をする。慥な手から慥な手へ渡す迄がわしの役ぢや。御機嫌ようお越しなされ。」

艚の音が忙しく響いて、山岡大夫の舟は見る見る遠ざかつて行く。

母親は佐渡に言つた。「同じ路を漕いで行つて、同じ港に着

くのでございませうね。」

佐渡と宮崎とは顔を見合せて、聲を立てて笑つた。そして佐渡が言つた。「乗る舟は弘誓の舟、着くは同じ彼岸と、どこかの寺の和尚が言うたげな。」

二人の船頭は、それきり黙つて、舟を漕出した。佐渡の二郎は北へ漕ぐ。宮崎の三郎は南へ漕ぐ。「あれ」「あれ」と呼びかはす親子主従は、只遠ざかり行くばかりである。

母親は、物狂はしげに舷に手を掛けて、伸上つて叫んだ。もう仕方がない。これが別れだよ。安壽は守本尊の地藏様を大切に、おし。厨子王はお父様の下さつた護刀を大切に、おし。どうぞ二人が離れぬやうに。安壽は姉嬢、厨子王は弟の名である。

る。

子供は「おかあ様」「おかあ様」と呼ぶばかりである。

舟と舟とは次第に遠ざかる。後には餌を待つ雛のやうに、二人の子供の開いた口が見えてゐて、もう聲は聞えない。

(森鷗外——山椒大夫)

新訂新撰國語讀本卷四終

大正十四年四月二十一日
教育部省檢定 中國語科 學校用

大正十三年十月二十四日印
大正十三年十月二十七日發
大正十四年一月十七日訂正印刷
大正十四年一月二十日訂正發行

新訂新撰國語讀本(全十冊)

定價	
卷一、二、各金四拾壹錢	臨時卷一、二、各金六拾八錢
卷三、四、各金參拾七錢	臨時卷三、四、各金六拾壹錢
卷五、六、各金參拾七錢	臨時卷五、六、各金五拾五錢
卷七、八、各金參拾參錢	臨時卷七、八、各金五拾五錢
卷九、十、各金參拾參錢	臨時卷九、十、各金五拾五錢



編者 佐々政一
 補修者 大町芳衛
 補修者 武島又次郎
 補修者 杉敏介
 印刷者 東京市神田區錦町一丁目十番地
 株式會社 明治書院
 取締役社長 鈴木友三郎

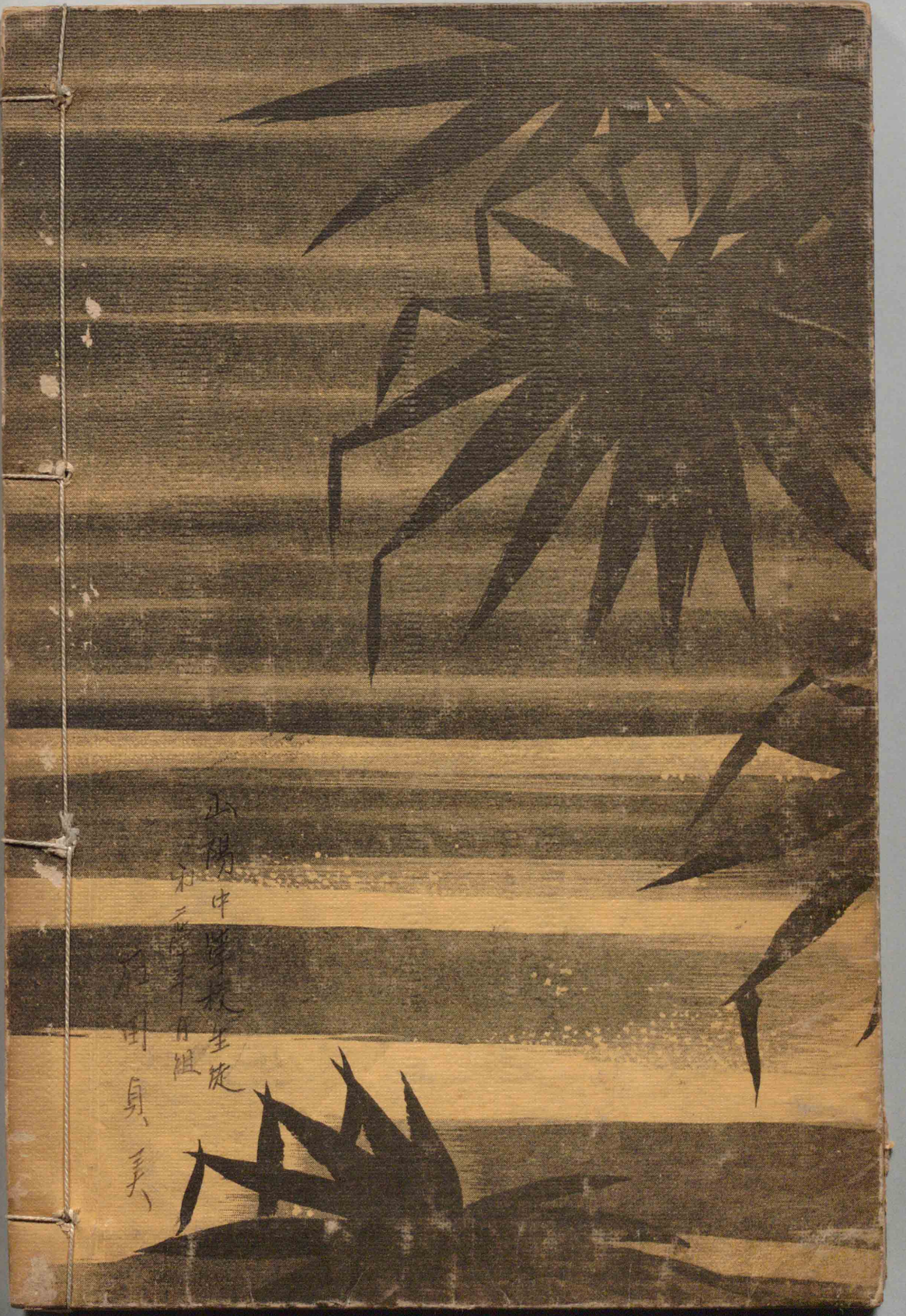
發行所

東京市神田區錦町一丁目
(振替口座東京四九九二番)

株式會社

明治書院

電話神田(25) 一四一四番



山陽中學校生徒
和元二年月日
石川貞美